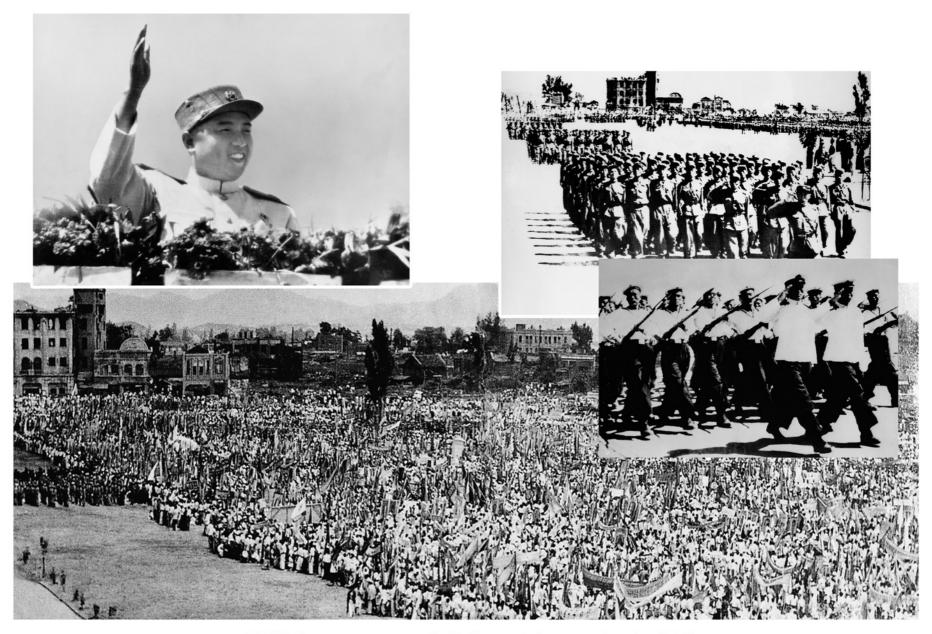
21世紀の朝鮮

21世紀の朝鮮

著　李成煥

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ101（2012）

9.9
인민정권은
우리 당 정책의 옹호자, 관철자
1948.9.9

祖国に凱旋して演説を行う金日成主席（1945・10）

英雄的朝鮮人民軍将兵と人民の熱烈な歓呼に手を振ってこたえる金日成主席

中学生たちとともにある金日成主席（1957・10）

労働者たちとともにある金日成主席（1959・9）

遺児学院の子供たちとともにある金日成主席（1961・5）

最初の「勝利－58」型トラックを見る金日成主席（1958・11）

朝鮮人民軍連合部隊の合同軍事演習を
指導する金日成主席（1970・10）

朝鮮の領海と領空を侵犯して
断固たる懲罰を受けたアメリ
カ帝国主義

アパートを見て回る金日成主席と
金正日総書記（1985・8）

街の形成の模型を見る金日成主席と金正日総書記（1980・4）

朝鮮人民軍創建60周年慶祝閲兵式の幹部壇にある
金日成主席と金正日総書記（1992・4）

商品展示会場を見て回る金正日総書記（2011・7）

熙川蓮河機械総合工場

人工衛星「光明星1号」と「光明星2号」の打ち上げ

大同江果物総合加工工場を現地指導する金正日総書記と金正恩同志（2011・7）

目　　次

はじめに

21世紀に入り、朝鮮は強盛・繁栄の偉大な転換期を迎えている。

今日のように朝鮮人民が自分の偉業に対する必勝の信念と自分の力に対する大きな自負に満ちあふれたときはかつてなかった。

わずか100年前まで日本の植民地として、立ち遅れた封建の枠から抜け出せなかった朝鮮が、今は国際社会の耳目を集め、強盛国家をめざしてまっしぐらに突き進んでいる。

強盛国家が間近に迫った歴史的時期に偉大な民族の父を失った朝鮮人民は、大きな悲しみを百倍、千倍の力と勇気にかえ、金正日（キムジョンイル）総書記の念願と遺訓通りに必ず強盛国家を建設するという強い信念と熱意に燃えている。

朝鮮における強盛国家の建設はもはや未知数の問題でないばかりか、未来形でなく現在形の問題となっている。

およそ強盛国家といえば、国力が強大で、その威信と尊厳が国際社会に認められている国だと言える。

国力が強大で繁栄する国を建設するのはすべての民族の一致した志向である。地球上に国家と民族が出現した時から数千年の年輪を刻んできた人類の文明史は、すなわち、すべての国と民族が強国への道を絶えず模索してきた歴史だったとも言える。その過程には、他国を侵略し略奪することによって肥大化したことを強大さとして誇る帝国もあったし、目覚しい物質的繁栄と資源の

豊かさを誇る民族もあった。しかし、人類はまだ理想とするに足る強国を目にしたことはない。

　遠からず浮上することになる朝鮮の強盛国家。

　その実体はどのようなものであり、その生命力はどうなのか、世人のこうした問いに多少なりとも答えを示すことになることを願って本書を執筆した。

　実際これまで、西側諸国の誹謗中傷や歪曲のため朝鮮の実情は正しく理解されていなかった。しかし、陽光をさえぎることができないように、真理は隠すことができず、抹殺することもできないのである。

　本書が、21世紀の朝鮮を理解し、誤った朝鮮観を正すための一助となれば幸いである。

2012年4月

一　歴史をさかのぼって見た朝鮮

ある国、ある民族について知るというのは決して容易なことではない。加えて、国と民族ごとに歩んできた道が異なり、それを取り巻く環境が異なるので、ある一つの共通の基準をもってある国、ある民族のすべてを評価し把握することはできない。

概して、国と民族を理解するうえで誰もが最初に関心を払う問題はその歴史であろう。

それは、歴史が決して過去の単なる記録ではないからである。歴史はすなわち正義であり真理であり、伝統であり継承であり、経験であり教訓である。「歴史を読めば知恵が増す」という言葉もあるように、われわれは歴史を通して昨日だけでなく、今日と明日を知り、理性を高めることができるのである。

こうした意味で、今日の朝鮮をよりよく知るためには、朝鮮民族の歴史をざっと振り返ってみることが非常に有益であり、また、第一の工程であると考える。

1　光り輝く朝の国

朝鮮は、ユーラシア大陸の東端に位置するさほど大きくない国である。面積は約22万3370平方キロであり、人口は約7000万である。

北は鴨緑江（アムロク）と豆満江（トウマン）を隔てて中国、ロシアと接しており、半島

として長く伸びている東、西、南の3面は太平洋の北西に当たる沿海である朝鮮東海、朝鮮西海、朝鮮南海に囲まれている。朝鮮東海を隔てて日本列島と向き合っている。

朝鮮という国名は、光り輝く朝の国を意味する。

※ 今日、朝鮮を称するКорея（ロシア語）、Korea（英語）、Corée（フランス語）、Korea（ドイツ語）、Corea（スペイン語）などは朝鮮最初の統一国家であった高麗（コリョ）という国名に由来している。

昔から朝鮮は、山河が絹糸で刺繍を施したように美しいということで「錦繍江山」と呼ばれてきた。

朝鮮は国土の80％以上が山地であり、高い山と深い谷、丘陵地帯が多く、山林がうっそうとしており、名山が多い国として知られている。朝鮮の6大名山と呼ばれる白頭（ペクトウ）山、金剛（クムガン）山、妙香（ミョヒャン）山、九月（クウォル）山、七宝（チルボ）山、智異（チリ）山は、その雄大さと奇妙さがよく調和しており、世界的にも広く知られている。特に朝鮮第一の高山である白頭山は、この地のすべての支脈がその源を発する祖宗の山として、朝鮮人民にとって特別な意味を持っている。言うなれば、古代ギリシアの人々の精神と体力を養ったのがオリュンポスの山地であるとすれば、朝鮮民族の気象と魂が根を下ろし育まれた所はほかならぬ白頭山だと言えるのである。朝鮮のあまたの山岳と江湖を従えて天を突くようにそびえ立つ白頭山は、文字通り朝鮮の象徴であり朝鮮民族の気象である。朝鮮の2大河川と言える鴨緑江と豆満江も白頭山天池に源を発している。天池の水が西へ流れているのが鴨緑江であり、東へ流れているのが豆満江である。

朝鮮は河川や湖、泉が多く、世界的にも河川網密度の高い国の一つであり、百数十余の鉱泉、温泉は水質がよく、世界的な関心事となっている。また、4季の区分が線を引いたように明確で、4季折々の風景にはそれぞれ独特の味わいがある。

朝鮮は景色が美しいだけでなく、資源も豊かである。

『愛国歌』にもうたわれているように、朝鮮は黄金のめぐみあふれる宝の国である。領土の大きさに比して地下資源が豊かであり、朝鮮の国土は平方ではなく立方で測るべきだという言葉があるほどである。特に、単位面積当たりの金の埋蔵量は世界有数であり、鉄鉱とマグネサイトも埋蔵量が多く品位が高いことで知られている。セメントの主原料である石灰石の分布面積は国土の25～35%を占め、石炭の埋蔵量も数十億トンに上る。

しかし、朝鮮が美しく住みよい国と呼ばれているのは、ただ景色が美しく地下資源が豊かであるからだけではない。

朝鮮は、太古の昔から朝鮮民族が住みついて生活を営み、自己の歴史を綿々と受け継いできた父祖の地であり、独自の文明をなす大同江（テドンガン）文化が創造され継承されてきた人類の文化発祥の地である。

世界的に人類の文明が独自に発祥した地域としては、エジプトのナイル川流域、中国の黄河流域、インドのインダス川流域、西南アジアのメソポタミア地域（チグリス、ユーフラテス両川の流域）が挙げられる。

最近、朝鮮の歴史学界では平壌（ピョンヤン）を中心とする大同江流域で発生、発展した古代文化を「大同江文化」と命名し、それを世界

5大文化の一つとして位置づけている。

大同江流域は川の流れが清く、肥沃な平野が広がり、物産に富み、気候が温和であるため、人類が地上に現れた当初から人間が住みついて生活を営んできた。

大同江流域では100万年前の原人の遺跡と旧人、新人の化石が発掘されている。これは、大同江流域が原人、旧人、新人など人類進化の順次的段階を経ながら朝鮮人の祖先が生活を営んできた所であり、人類の初期文明が起こった由緒ある歴史的な地であることを示している。

大同江流域は原始文化の発祥地であると同時に、古代国家の発生地でもある。

朝鮮民族の始祖檀君（タングン）は、前30世紀初に平壌を中心としてアジア東部で最初の古代国家である古朝鮮を建てることにより、新しい文明時代を開いた。

1993年10月に発表された朝鮮社会科学院の「檀君陵発掘報告」によると、檀君の遺骨は発掘当時から5011年前のものであることが科学的に実証されている。このことから、古朝鮮の建国始祖である檀君が神話的存在ではなく実在した人物であり、朝鮮人がよく口にする5000年の歴史という言葉が決して誇張ではないことが科学的に証明された。檀君が実在した人物であることが明らかにされることにより、朝鮮民族は自己の始祖を見いだし、民族の悠久さと単一性を確認することになった。

今も大同江流域では、青銅器や土器、鉄器、金製の遺物などがしばしば出土している。またこの地域では、世界的に最も早い時

期にイネやアワ、マメ、キビなどの5穀が栽培され、3眠蚕が飼われていたことを示す物質的資料も発掘された。加えて、石の表面に星座を刻んだ支石墓が200基以上も発見されている。大同江流域の住民は早くから、文明時代の文字である神誌文字を使用した。以上見たように、平壌を中心とする大同江流域で発生した大同江文化は、古代文明のあらゆる徴表をそなえており、世界の古代文明に伍することができる。

このように朝鮮は、百数十万年前に人類が出現して文明を築いてきた歴史の聖地であり、アジアで最も早い時期に国家と民族を形成し、独自の発展の道を切り開いてきた世界に誇るに足る国である。

2　英知に富む勇敢な単一民族

世界には200余の大小の国と数千余の民族・種族があると言われている。朝鮮の隣邦である中国には漢族、満州族など50余りの民族があり、インドにはヒンドゥスタン族、ベンガル族など200余りの種族・民族があり、500以上の種族をもつ多民族国家もあるという。近代に至って民族が形成されたと見られる西側諸国もほとんどが多民族国家である。

しかし、朝鮮は世界で最も歴史が長い単一民族国家である。朝鮮民族は昔から同じ血筋を受け継ぎ、同じ言語と文化をもち、同じ領土で生活を営んできた単一民族であり、自らの勤勉な創造的活動によって立派な物質的・文化的富をつくり、自らの運命を切

り開いてきた英知に富む人民である。世界で最初に鉄甲船や金属活字、天文台をつくって利用した教養ある民族も朝鮮民族であり、日本をはじめアジアの文化の発展に大きく貢献した民族も朝鮮民族である。

朝鮮民族はアジアで最も長い民族史をもっており、その過程で自らの民族的自主権と民族性を抹殺しようとする幾多の挑戦と試練を受けたが、そのたびにそれを勇敢に乗り越え、他民族と同化することなく独自の民族性を綿々と受け継いできた。

朝鮮の歴史において、最も強大で繁栄を極めた時代は高句麗（コグリョ）時代であった。高句麗は前277年に高朱蒙（コジュモン）（東明王（トンミョン））が建てた国であり、およそ1000年にわたって存在したアジアの強国であった。高句麗の領土は4世紀末葉に至って、東西2400キロ、南北1600キロの広大な地域を占めていた。国力が強大であった高句麗は事大主義に走らず、外部勢力の干渉と侵略を断じて許さなかった。尚武の精神が強かった高句麗の人々は、幼い時から馬術と弓術を好み、武術を磨く過程で強い民族的自尊心と勇猛心を培った。高句麗の人々の崇高な愛国心とすぐれた武芸は、外敵との戦いで余すところなく発揮された。それゆえ、周辺諸国が数十万、時には数百万の兵力をもって頻繁に攻めてきたが、一度も高句麗を征服することはできず、つねに惨敗を免れなかった。

同族諸国を一つに統合しようとする高句麗の志向は、その継承国である高麗によって実現された。918年に王建（ワンゴン）によって建てられた高麗は、朝鮮の歴史で初めて国土の統一を実現し、民族の統一的発展の道を開いたことで世界にその名が広く知られている。

高麗の人民は、3度にわたる契丹の侵入を防いで祖国の地と民族の尊厳を守りぬき、女真族の侵入と略奪行為に対処して400キロに及ぶ高麗長城と九つの城を築いた。その後も高麗の人民は、北からのモンゴルの侵入と南からの倭寇の侵入を防ぐ戦いで民族の英知と尊厳をとどろかせた。

李(リ)朝時代にも朝鮮人民は侵略者に抗して勇敢に戦った。その代表的なものは、一般に「壬辰祖国戦争」と呼ばれる7年間にわたる日本との戦争であった。

外敵の侵入が絶えなかったこの地には、民族が誇る愛国名将も輩出した。高句麗の乙支文徳(ウルチムンドク)、淵蓋蘇文(ヨンゲソムン)、高麗の姜邯瓚(カンガムチャン)、尹瓘(ユングァン)、李朝の南怡(ナムイ)、李舜臣(リスンシン)らを名将として挙げることができるであろう。高句麗の乙支文徳将軍は、612年に隋が300万の大軍をもって高句麗に侵入した時、高句麗軍の総指揮官として敵軍の弱点を利用し、清野戦術と誘引戦術によって敵軍の水陸並進の企図を破綻させ、高句麗軍が大勝を博するのに大きく貢献した。淵蓋蘇文将軍もすぐれた知略と豪胆をもって、数度にわたって唐の数十万の侵略軍を撃退し、高句麗の威容を満天下にとどろかせた。大軍を率いて高句麗を侵略しようとして失敗した唐の皇帝は、いまわのときに二度と高句麗を侵略しようとしてはならないと言い残したという。その後、宋のある王が側近の臣下に、高句麗に攻め入った唐の太宗はなぜ勝てなかったのかと聞くと、臣下は高句麗の淵蓋蘇文が傑出した人物であったからだと答えたとのことである。淵蓋蘇文の存命中は、唐は二度と高句麗に手出しをしなかった。

李朝の李舜臣将軍は海戦において敵する者がない名将であっ

た。李舜臣は手工業者や水軍の兵士たちと力を合わせて世界最初の鉄甲船である亀甲船をつくりだし、壬辰祖国戦争が起こると朝鮮の艦隊を率いて日本侵略軍撃滅の戦いに立ち上がった。壬辰祖国戦争の全期間、李舜臣将軍率いる朝鮮の水軍は500隻以上の敵船を撃沈した。1905年5月、朝鮮海峡でロシアのバルチック艦隊を全滅させて露日戦争の勝利をもたらした日本の連合艦隊司令長官の東郷大将は、自分の古希の祝宴で、司会者がわたしをイギリスのネルソン提督にたとえるのはいざ知らず、朝鮮の李舜臣にたとえるのは過分なおほめの言葉だ、と言ったという。それだけ李舜臣将軍の名声が世界に広く知られていたということだろう。

朝鮮民族は経済と文化を発展させるうえでも大きな痕跡をとどめた。

古代から鉄を生産していた朝鮮民族は、3国（高句麗、新羅（シンラ）、百済（ペクチェ））時代には鉄材で生活用具をつくって広く利用し、金、銀、銅の細工術も相当な水準にあった。特に高句麗は、同族諸国である百済、新羅、伽倻（カヤ）などの朝鮮半島はもとより中国大陸や日本にまで自国の発達した文化を伝播することにより、東アジアの文化発展において先導役を果たした。7世紀前半に建設された世界最初の天文台である瞻星台、皇龍（ファンリョン）寺の9重の塔、数千年が経った今も原色をとどめている高句麗の古墳の壁画や彫像などは、朝鮮民族の高い建築術と美術水準をよく示している。

高麗時代には、世界で初めて金属活字を発明して出版業を大いに発展させ、色と模様、形が特出していることで世人が宝と見なす高麗磁器をつくりだして高麗の名を世界に知らしめた。

また、1444年に古代の神誌文字を継承して「訓民正音」という新しい文字を創製することによって、朝鮮固有の民族文字をもつようになり、言語生活の統一性と大衆性を保障し、民族文化遺産をより豊かにすることができた。

このように朝鮮民族は、長きにわたって同じ領土で単一民族としての血筋をしっかり受け継ぎながら、すぐれた民族性を形成し固守してきた尊厳ある民族であり、人類の科学と文化の発展に自己の一ページをしるした英知と才能に富む教養ある民族である。

3　亡国の悲運にとざされた国

朝鮮半島はその地政学的特性のため、近代以後、列強の角逐の場となってきた。

朝鮮半島をめぐる周辺諸国の争いは、19世紀の末から20世紀の初めにかけて、より熾烈かつ頻繁に繰り広げられた。中国と日本、日本とロシア間の矛盾と衝突が激化し、朝鮮半島は文字通り「東北アジアの火薬庫」となった。朝鮮半島はいやおうなしに大国の政治の渦中に巻き込まれ、国の運命は俎上の魚も同然であった。

当時、大国の角逐の渦中から抜け出そうともがいていた李朝封建政府は「以夷制夷」、すなわち大国を引き入れて他の大国を牽制しようとした。

封建政府は清国を牽制するために日本を引き入れ、日本を退けるためにまたロシアを呼び込むといったように、国の運命を救おうと努力を重ねた。しかし、いくら懸命に努力しても、すでに傾

いた国の運命を救うことはできなかった。

当時、朝鮮半島をめぐる大国の角逐で勝利を収めたのは新興の軍事強国日本であった。久しい前から朝鮮占領の機会を狙っていた島国の日本は、日清戦争（1894～1895年）を通じて朝鮮に深く根を下ろしていた清国勢力を駆逐した後、日露戦争を起こして、1905年には危険な競争相手である帝政ロシア勢力を排除した。その後日本は、日露戦争に投入していた多くの兵力を朝鮮封建政府の首都であるソウルに引き入れ、王宮を二重三重に包囲する一方、随所に軍隊を配備して朝鮮人民の反日気運を抑えた。

膨大な侵略兵力を引き入れて殺伐たる雰囲気をつくりだした日本は、枢密院議長の伊藤博文を特使として朝鮮に派遣した。伊藤は朝鮮の皇帝高宗（コジョン）と諸大臣を威嚇、脅迫し、俗に「乙巳5条約」と言われる「韓日協商条約」を捏造した。1905年11月に捏造されたこの条約により、朝鮮は外交権をまるごと日本に奪われ、事実上日本の植民地となったのである。

最近、「乙巳5条約」の原本が発掘、公開されたが、それには当時、李朝封建政府の最高主権者であった皇帝高宗の署名と国璽捺印がないという。これは、軍事的威嚇と詐欺の方法で捏造された「乙巳5条約」が不法無効の文書であることを示している。

当時、高宗皇帝はこの「条約」の不法性と無効を宣し、列強の力を借りて国権を回復するため、1907年6月、オランダのハーグで開かれた第2回万国平和会議に三人の密使を派遣した。しかし、どの国も朝鮮に同情すらせず、密使の一人であった李儁（リジュン）は会議場で割腹し、朝鮮民族の独立の意志を示威した。

朝鮮封建政府の外交権を奪った日本はそれに飽き足らず、1910年8月22日、またもや軍事的威嚇のもとに「韓日合併条約」を捏造し、朝鮮を完全に併合した。

こうして、500余年間つづいた李朝は滅亡した。

5000年の歴史を受け継ぎながら国土を守ってきた朝鮮民族が、近代に至ってこのように植民地奴隷の悲劇に見舞われたのは、まさに国力が疲弊したためであった。

朝鮮の著名な作家朴テウォンは長編小説『鶏鳴山川は明けゆくのか』で、亡国の危機に直面していた当時の状況について次のように書いている。

「……あの海の向こうの植民地主義者らが虎視眈々と機会を狙い、自分勝手に『東方の隠遁国』と呼んでいるこの国—— 朝鮮の夜は長かった。

……祖国の運命と民族の将来を考え、国家100年の大計を立てるべき時はまさに今だというのに、この国の両班(リャンバン)さまたちの眠りは一向に覚めようとしない。

一体どうするつもりなのか？　まだ眠っている。ぐっすり眠っている。……」

亡国の道を歩んでいた李朝封建統治末期の実相をなまなましく描き出したくだりである。

空には飛行機が飛び、地上には汽車が走る時代、資本主義諸国が新式の5連発銃に大砲と軍艦をもって大陸と大洋を横断していた時に、腐敗した無能な李朝の封建支配層は鎖国の垣をめぐらし、太平の聖代を云々し、さびついた槍と火縄銃しかなかったにもか

かわらず、国の発展や国力の強化には関心を払わなかったのだから、国が滅びるのは理の当然であった。

自国のまともな軍隊と武力装備がなくて他国の軍隊に王宮の警衛を任せたり、王が「罪人」のように他国の公使館に監禁され、宮城を包囲した日本の軍隊と警察の庇護のもとに大陸浪人らが婦女子の居間に乱入し、王妃をめった斬りにして焼殺しても何も言えなかったのが、19世紀末期の朝鮮の悲惨な現実だったのである。

ゆえに憂国の士は、蒼々たる竹林を見ては、あれがみな朝鮮の軍隊であればどんなにいいだろうかと悲嘆にくれ、激しいにわか雨を見ても、あれがみな日本の侵略者の頭上に降り注ぐ矢か銃弾、砲弾であれば国がこのように滅びはしなかったであろうと悲憤慷慨したのである。

しかるに、無能な封建支配層が傾いていく国の運命を救うためだとしてしたことと言えば、せいぜい国号を帝国に改めたことくらいである。彼らは1897年10月、国号を「大韓帝国」、国王を「皇帝」と改称し、朝鮮が専制君主国であることを宣布した。

しかし、国号を改め、王が皇帝になったからといって、事大主義と屈従、外敵の侵略と略奪を免れるわけはないのである。

国の大臣、政治家を自任するこうした無能な支配層のため、朝鮮は結局国権を完全に失い、人民は亡国の民となり、半世紀近くも血と涙の苦役を強いられたのである。

近代朝鮮の亡国史は歴史に一つの真理を刻んだ。それは、国と民族の繁栄を招くには卓越した領袖を戴かなければならないと

いうことである。

　国が滅びた時、ある愛国者は「天も無情だ。ロシアにはレーニンのような傑出した領袖をたまわったのに、わが民族にはなぜそのような偉人を戴かせてくれないのか」と痛嘆し、自決して果てた。それは、国を失った朝鮮民族の切なる願いがこめられた絶叫であった。

　民族の領袖を求めて声を限りに叫び、遠く険しい道をさまよっていた朝鮮人民は、20世紀に至ってついに希世の偉人たちを戴き、民族繁栄の偉大な転換期を迎えることになったのである。

二　20世紀を輝かせた社会主義朝鮮

朝鮮における新しい社会の建設は、1948年9月の朝鮮民主主義人民共和国の創建から数えても60余年の年輪を刻んでいる。朝鮮民族の5000年の歴史からするとこれは瞬間にすぎない。しかし、長いといえば長く、短いといえば短いこの60余年の間、朝鮮は社会主義建設において目覚しい成果をあげることによって20世紀を飾り、今日はさらなる自信をもって強盛国家建設への道を突き進んでいる。

世界はすでに、朝鮮が歩んできた社会主義の建設史に、社会主義本来の姿、科学としての社会主義の正当性と不敗性を見た。

今日、朝鮮が建設している強盛国家は、社会主義の基盤の上に築かれる社会主義強盛国家である。こうした意味で、すでに1960年代から世界の関心を集めていた朝鮮の社会主義を見直す必要がある。そして、東欧の社会主義圏が解体した「政治的地殻変動」と、米国をはじめとする西側諸国の執拗な孤立・圧殺策動の中でも、どうして朝鮮が崩壊せず浮上して強盛国家を建設しているのか正しい答えを求めるべきである。

1　社会主義朝鮮の始祖金日成主席

20世紀初葉、亡国の恥辱を甘受していた朝鮮民族が、再生の春

を迎えて現代朝鮮の歴史を輝かせることができたのは、全的に、奪われた国を取り戻し、社会主義朝鮮を打ち立てた金日成（キムイルソン）主席の功績である。

昔から人々は、民族の運命を救った偉人たちの功績を功績中の功績としてたたえてきた。

旧約聖書の「出エジプト記」には、今でもイスラエル人や西側諸国の歴史家たちが民族の救世主として賛美している伝説中の人物モーセが出てくる。前1300年頃、エジプトの圧制下で奴隷生活を強いられ、苦しんでいるヘブライ（イスラエル）民族を救い出し、父祖の地カナンに導き入れたモーセの生涯を、歴史家たちは「一篇の英雄叙事詩」として賛美しているのである。

——モーセが九死に一生を得て生き地獄から脱出し、ヘブライ民族を率いて紅海に至った時である。

後ろにはエジプト軍が迫ってきた。捕まれば皆殺しにされるばかりか、民族が滅亡しかねなかった。

「ああ、ここまで来て死ぬことになろうとは！」

人々はモーセを恨んだ。

この時、モーセは神に祈りをささげた。

「あなたの民が死を前にしております。あなたの全能によって助けたもれ」

すると、風が吹いて海が二つに分かれた。ほどなくヘブライ民族が無事に海を渡り、エジプト軍がその後を追ったが、海は彼らを呑み込んでしまった。——

聖書のこうした内容を借りて、絶体絶命の危機に瀕した朝鮮民

族の運命を救った金日成主席を「20世紀のモーセ」と呼ぶ歴史家やカトリック教徒もいる。

しかし、モーセが神の助けでヘブライ民族の運命を救った伝説中の英雄であるなら、朝鮮の金日成主席は、10代の若少の身で国と民族の運命を救うという雄志を抱いて革命の道を踏み出し、20余星霜にわたる血みどろの抗日大戦を展開して、朝鮮民族を日本帝国主義の植民地のくびきから解放した現世の英雄である。

金日成主席は、民族の運命が破滅に瀕していた日本帝国主義植民地支配の最も暗澹たる時期に抗日遊撃隊を結成し、白頭山を中心に国内と満州の広野を縦横無尽に縫いながら、絶妙無比の遊撃戦法によって「無敵皇軍」をもって自任する日本軍を撃滅し、民族再生の活路を切り開いた。30代にして朝鮮を解放した主席は党と国家、軍隊を創建する歴史的偉業を成し遂げ、40代には米国がしかけた侵略戦争から祖国を守りぬき、ついで社会主義革命を遂行して社会主義制度を確立した。

1969年10月27日、米国の『ニューヨーク・タイムズ』紙は前例のない特集を組んで世界を驚嘆させた。「朝鮮は20世紀の英雄を生んだ」という大見出しで金日成主席の伝記『金日成伝』第1巻の内容を詳細に紹介する記事をまるまる1ページにわたって掲載したのである。

それは、新刊書を紹介する単なる記事ではなかった。朝鮮と敵対関係にある米国の権威ある新聞がこうした特集を組んだのも異例な出来事であったが、金日成主席を「20世紀の英雄」としてたたえたのは実に驚くべきことであった。『ニューヨーク・タ

イムズ』に次いで英国の『ロンドン・タイムズ』、日本の主要なメディアも同様の内容を報じた。

20世紀の英雄、それは真に世人が金日成主席に贈った最高の称号であり、限りない尊敬と信頼の現れであった。

どの国、どの民族を問わず、自己の歴史を創造するにあたって目標として掲げ実現しようとするのは、国と民族の富強・繁栄である。国と民族の富強・繁栄をもたらすにはどの道を進むべきか、これは数千年の間、すべての国と民族がその解決に苦慮してきた共通の宿題であった。

昔から朝鮮人は、夜空に丸い月が昇ると、月の桂を金の斧で伐り倒し、玉の斧で削って藁葺きの3間の家をつくり、親を奉養しながら千年万年幸福に暮らしたいという、ささやかな夢のこもった歌を好んでうたった。しかし、朝鮮民族は5000年の長きにわたる歴史の中で、自分たちのそのささやかな夢さえ実現できなかった。

朝鮮民族のこの夢を実現し、民族万代の富強・繁栄のための強固な土台を築いたのはほかならぬ金日成主席であった。

金日成主席は社会主義への道を民族繁栄の唯一の活路とし、この地に富強・繁栄の社会主義社会を建設した社会主義朝鮮の偉大な始祖である。

3年間の朝鮮戦争の時、朝鮮は米国によって完全に廃墟と化した。米軍の爆撃によって朝鮮で何がどれほど破壊されたかは、あえて列挙する必要がない。なぜなら、朝鮮人民は解放後から戦争前までの5年の間に額に汗して創造したものをすべて失ったから

である。破壊された財産は天文学的数字に上り、それは1949年の生産能力の6年分に当たる血と汗の結晶をことごとく奪われたことになる。

こうした状況下で経済を立て直すというのは、実際上、ゼロから出発するより難しいことであった。古着をつくり直すのは新しい布地で新しい服をつくるより手間と費用がかかるように、廃墟の中からさまざまな残骸をかたづけるのにも多くの人力と時間を要するからである。

しかし、朝鮮人民はくじけたのではなく、米国との戦争に勝ったその気勢、その気概で再び立ち上がり、復興建設と社会主義制度確立のために奮闘した。

戦後の復興建設と社会主義革命を遂行するにあたって、朝鮮は二つの方向の独創的な路線を打ち出した。一つは、重工業を優先的に発展させながら、同時に軽工業と農業を発展させることを戦後の経済建設の基本路線として施行していくことであり、今一つは、都市と農村において生産関係全般を社会主義的に改造することであった。

重工業の優先的な発展を保障しながら、同時に軽工業と農業を発展させるのは、朝鮮の現実に最も適した独特で主体的な経済発展路線であった。

朝鮮は重工業を優先的に発展させるうえで、重工業のための重工業ではなく、人民生活の向上と密接に関連している部門の重工業を発展させることに重点を置いた。すなわち、石炭、金属、電力、機械、化学、建設を発展させ、機械製作部門では工作機械と

鉱山、紡織、肥料、農業機械の発展に大きな力を注いだ。

生産関係の社会主義的改造は、私的所有を完全に撤廃することによって、人間による人間の搾取と抑圧を最終的に一掃する社会主義革命の側面からのみならず、当時の朝鮮の現実から必然的に提起された問題でもあった。すなわち、戦争によりことごとく破壊されたため、工業と農業の復興は言うに及ばず、個々人が自分の力だけでは生活状態を改善することはできず、みなの力と生産手段を合わせて集団の力で対処してこそそれが可能だったのである。それゆえ朝鮮では、「困難な時であるほど力を合わせなければならない」という生活の真理が大衆の要求となり、また、その要求を実現しうる力が準備されている状況下で、たとえ生産力の発展水準が低いとしても、十分生産関係の社会主義的改造を実現できるということを確信し、社会主義革命を遂行する独創的な道を歩んだのである。

朝鮮ではすでに解放直後、土地を個人農に分与した反面、産業は大部分国有化する措置を講じた。これは民族経済建設の一環であると同時に、社会主義に向けた準備過程であった。また当時、小規模消費財商品を生産していた個人企業は、戦争によって大部分が破壊された。そのため、私営商工業の社会主義的改造を収奪ではなく、協同化の方法で比較的短期間に完成することができた。さらに、社会主義革命を遂行するにあたって、技術改造と人間改造を密接に結びつけて進めることにより、それまで搾取階級に属していた私営商工業者をみな社会主義的勤労者にするという成果をあげた。

朝鮮では農業の協同化を実施するにあたっても、農民自身の意思による自発性の原則を堅持し、モデルケースをつくってそれを一般化する方法で農民を説得し、これに国家の積極的な指導と支援を結びつけるという独特な政策を実施した。

こうして朝鮮は、社会主義革命という最も深刻な社会の変革を、暴力と収奪の方法ではなく、人民の自発的参加のもとに民主的に、かつ徹底的に成し遂げたのである。こうした例は、かつて植民地であった国々のうち朝鮮にしか見られない。

社会主義革命が4～5年という短期間に朝鮮人民自身の力によって成功裏に遂行された結果、朝鮮では1958年8月にアジアで初めて社会主義制度が確立した。

朝鮮が社会主義革命と建設において、このような前人未踏の新しい道を何らの偏向や曲折もなしにまっすぐに歩むことができたのは、金日成主席の主体的かつ独創的な社会主義革命理論と賢明な指導のたまものである。

3年間の苛烈な戦争を通じて、抗日の伝説的英雄としての金日成主席の偉大な風格を確認した世界は、朝鮮における戦後の復興建設と社会主義革命の過程を通じて、今一度卓越した政治指導者としての主席の偉大さを目のあたりにした。

ゆえに金正日総書記は、「朝鮮民族の建国の始祖は檀君ですが、社会主義朝鮮の始祖は偉大な領袖金日成同志です」と指摘しているのである。

したがって、今日朝鮮人民が自分の祖国と民族を檀君朝鮮、檀君民族と呼ぶ以外に、今一つの象徴的な意味をこめて金日成朝

鮮、金日成民族と呼んでいるのは至極当然かつ自然なことだと言える。

2　自主、自立、自衛の社会主義

金日成主席が打ち立てた朝鮮の社会主義の特徴を一言で要約して言えば、チュチェ思想を具現した社会主義、チュチェの社会主義だということである。

チュチェ思想は、一言で言えば、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという思想、換言すれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想である。このようなチュチェ思想を社会主義建設に具現するうえで必ず堅持すべき原則があるが、それがほかならぬ政治における自主、経済における自立、国防における自衛である。

前でも簡単に触れたが、国力の構成要素には様々なものがあり、それを大別すると政治的力量、経済的力量、軍事的力量の三つだと言える。このような国力を外部の支援や援助を受けずに自力で築き、自国の方式で養い、自国の実情に即して活用することが自主、自立、自衛だと理解するなら、それはどの国を問わず、第一の原則、戦略となると言えるだろう。

朝鮮は、国内政治や対外関係において自主性を堅持することを、自尊心のみならず国と民族の運命に関する死活の問題と見なし、いささかも譲歩したり妥協することなく自主性を堅持している。

一般にあらゆる政治が追求する目的は、国家の主権および領土

の保全、外部勢力の侵略からの国家と国民の安全保障、政治的安定と社会・経済の発展、国民生活の向上と国民の精神力の発揚、世界的規模における国の影響力の行使などだと言える。こうした見地からすると、国家政治において自主性を堅持する問題は、単に弱小国の生存戦略であるのみならず、政治の基本機能、基本使命だと言える。

朝鮮の自主政治は、「われわれの方式で生きよう！」という戦略的路線に顕著に現れている。金正日総書記が指摘しているように、われわれの方式で生きるということは、すなわちチュチェ思想の要求どおりに生きるということである。換言すれば、チュチェ思想の要求どおりに自分の信念にしたがって思考し行動し、朝鮮人民の利益と朝鮮の実情に即して社会主義建設を進めることを意味する。

自主政治には事大主義や教条主義、模倣の居場所がない。封建支配層の事大主義と教条主義のため亡国の歴史まで体験した朝鮮民族にとって、自主政治は死活の要求であった。

しかし、大国の強権政治が横行する国際社会において、自主政治を行うというのは決して容易なことではない。今も世界の政治舞台を見渡すと、たとえ領土が大きく経済力があるとしても、政治に自主性が欠けているため、おのずと人の顔色をうかがい、定見もなしに行動する国や政治家が少なくない。

朝鮮は、あらゆる問題を自分が決心し自力更生によって解決し、自分の方式で生きている。それは、これまで朝鮮が大国主義者の絶え間ない圧力と干渉を断固はねのけ、自分のやり方で社会主義

を建設してきたことを見てもよく分かる。それで、1990年代の初めに東欧の社会主義諸国がすべて崩壊した時にも、朝鮮だけは微動だにせず社会主義を固守し、前進させることができたのであろう。もし、東欧の社会主義諸国の崩壊を社会主義そのものの本性から帰結した必然的現象と見るなら、朝鮮のチュチェの社会主義もそれが社会主義である以上、東欧のその運命を免れないとの結論に達する。しかし、東欧の社会主義諸国の崩壊の原因は、一部の人が主張しているように「社会主義の理念そのものが間違っている」のではなく、その運営を誤ったことにある。すなわち「誤れる社会主義」の結果ではなく、「社会主義の誤り」の結果だったのである。一言で言えば、社会主義を運営するにあたって自主性を堅持しなかったところに、その崩壊の主因があったのである。

自主政治は民族的自尊心に根差しており、民族的自尊心は主に外交に現れる。

一つ実例をあげよう。いつか、ジュネーブ会議で南朝鮮の「外務部長官」は朝鮮の統一問題について流暢な英語で演説したが、彼はそれをあたかも参加者の関心をひくための洗練された外交的資質であるかのように自慢した。反面、国連総会に初めて参加した朝鮮民主主義人民共和国の代表はいささかも躊躇することなく朝鮮語で演説した。これについて、ひところ南朝鮮「政府」の官吏たちは、国際会議に参加した代表が英語が下手なので他国の外交官たちが解せない朝鮮語で演説したと嘲笑した。しかし、その時会議に出席した朝鮮の代表たちは、米国人たちも感嘆したように英語が堪能だった。南朝鮮の官吏たちは、これがまさに民

族的自尊心であり自主精神の現れであるとは思いも及ばなかったのである。政治における自主の原則は、このように小さなことから始まるのである。個々人の関係においても国の関係においても、自分をまねようとしたり自分の歓心を買おうとする者に対しては尊敬の念が生まれないものである。

朝鮮はいかなる場合も国と民族の自主性を生命とし、それを少しでも侵したり損なう者は秋毫も容赦しない。

朝鮮人が自主性をどんなに尊び、固守しようとしているかは、1990年代に始まった朝米核対決の一端を見ただけでもよく分かる。当時、米国の核査察圧力の主な目的は、朝鮮の「核保有」を恐れたからでもあるが、それよりも自主的という朝鮮の強い自尊心を打ち砕き、国際政治社会における共和国の権威を失墜させることにあった。これに対し朝鮮も、核兵器開発のいかんはさて置き、自国の自主性に対する重大な侵害と見なし、断固として立ち向かった。核兵器を相当に保有しているイスラエルに対しては口をとざしていながら、当時核兵器がないと宣言していた朝鮮に対しては国際世論を操作し、圧力をかける米国の偏見的な戦略により、朝鮮半島の情勢は常時緊張状態にあった。朝鮮がそうした圧力にすぐ屈するだろうと米国が考えたかは定かでないが、とにかく米国は重大な問題において判断を誤った。それは、米国が自主性を生命とする朝鮮民族の気質、国と民族の自主性を侵す者は秋毫も容赦しない金日成主席と金正日総書記の信念と意志をあまりにも知らなかったということである。

朝鮮は経済における自立を確固と実現した社会主義国である。

自主政治は、これを裏付ける物質的土台、経済的土台がなくては虚勢にすぎない。経済は政治の物質的基礎であり、社会発展の基本分野である。人々が当該の社会制度でどのような生活を営むかは、直接的に経済生活、物質生活に現れる。経済的従属はすなわち政治的従属を生み、政治的従属は経済的従属を倍加する。

経済における自立に関連しては一般に、国土が大きく人口と資源が多い国でのみ自給自足の経済の運営が可能だとする見解が普遍的であるが、そうした理論は朝鮮における自立的民族経済建設によって否定されている。それで今日、朝鮮の自立的民族経済は、発展途上国開発の問題を研究する経済学者や社会学者の研究対象にもなっている。

朝鮮の自立的民族経済建設路線の内容は三つに大別されるが、第1に、多面的かつ総合的に発展した経済を建設することであり、第2に、自国の原料・燃料・動力基地を強固に築くことであり、第3に、経済の近代化と民族幹部による経済の運営を実現することである。

朝鮮の自立的民族経済建設で特に注目すべきことは、他の国々に比べて国民総生産における対外輸出の比率が相当に低いという点である。1980年代に米国のある社会学者は、人口と面積を考慮に入れた朝鮮の経済が実質的に維持されるには貿易依存度（輸出依存度プラス輸入依存度）が最小限15%でなければならないが、朝鮮ではそれを4・8%で維持するほどの徹底した自給自足指向の経済を建設し、これとは対照的に南朝鮮の経済は貿易依存度が80%を超えており、過度の対外依存性を見せていると指摘した。

経済の貿易依存度が最小限にとどめられているということは、自国の原料基地による原材料の供給が十分であり、技術の対外依存がきわめて少ないことを意味し、まさにこれが経済における自立性、主体性を実現した朝鮮経済の最大の長所と言うべきであろう。

したがって朝鮮の自立的民族経済は、外部からの衝撃に強い弾力性をもって対応することができる。朝鮮の自立経済は、1970年代に世界経済に大打撃を与えたオイルショックの嵐にも、1990年代の末に東南アジアや南米など各地域を襲った金融危機にも、2008年の米国発の世界金融危機にも微動だにしなかった安定した経済である。それは、社会主義建設に着手した当初から経済における自立を第一の原則とし、主体化され近代化された自立的民族経済を建設してきた金日成主席と金正日総書記の賢明な指導の必然の結果である。経済における自立、自立的民族経済については次の章でもう少し詳細に論じることにし、国防における自衛の問題について述べよう。

朝鮮は国防における自衛を完全に実現した社会主義国である。

昔から軍事は国事の中の国事と言われてきた。特に、1930年代から先軍を行ってきた朝鮮において、国防事業は最も重要な核心事項となっており、21世紀に入ってより切実な問題として提起されている。

朝鮮における国防事業はあくまで自衛的な性格を帯びている。

金日成主席は、つとに抗日革命戦争の時期に遊撃根拠地防衛戦闘で得た貴重な経験にもとづき、全人民的な国家防衛システム

を確立した。特に1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争以降、軍事境界線を境にして60年余りも米国と停戦状態にある朝鮮としては、自衛の原則にもとづいて国防に万全を期するしかなかったのである。国防に関する問題においては、「99%間違いないから1%はかまわない」といった気の緩みはあり得ないというのが朝鮮の国防重視の観点である。

金日成主席はすでに1962年から、経済の発展にある程度支障をきたすとしても、社会主義を守り成功裏に建設するためには国防力を強化しなければならないという論理にもとづいて、経済建設と国防建設の並進路線を打ち出し、それを貫徹してきた。ここで特に注目すべきことは、国防における自衛のための4大軍事路線である。4大軍事路線とは全軍の幹部化、全軍の現代化、全人民の武装化、全国土の要塞化を意味し、既成の「人民戦争」の概念とはまったく異なる国防戦略である。4大軍事路線が攻撃のためのものであるか、さもなければ防衛のためのものであるかは、全国土の要塞化一つを見ただけでも判断を下すことができる。すなわち、朝鮮は軍事装備と施設の大部分を地下に置くかコンクリート掩蔽物で保護することで要塞化しているが、これは迅速な奇襲攻撃にははなはだ不適である。それは文字通り、自国の領土内で長期防衛戦を行うのに適している。

軍隊の幹部化、現代化は、国防事業において最も重視されている路線である。

実際、軍隊の力の強弱は、単に兵力や航空機、戦車、自走砲の数といった数的指標のみでは結論を下しがたい問題である。数量

化しうる指標とともに、軍隊の思想・精神状態、戦略理論と戦法、軍隊の伝統、組織と編制および指揮など、質的要因を加えて評価してこそ、実際の軍隊の力の強弱を知ることができるのである。戦争で軍人の精神力、愛国心、士気、戦法や指揮といったものがいかに重要な役割を果たすかは、世界の戦史をひもといてもよく分かる。

ソ独戦争の時、ファシスト・ドイツの最後の牙城であったベルリンの国会議事堂に赤旗を立てたのはソ連軍の第150歩兵師団であった。この師団は戦争の初期から苦しい戦いを続け、ドイツの国会議事堂の前に至ったのである。戦闘を前にして師団長は兵士たちにこう言った。

——最後の決戦の時が来た。その間、多くの戦友が戦場で果てた。われわれは彼らの分まで合わせて、あの国会議事堂のいただきに赤旗を立てなければならない。そのためには犠牲も覚悟しなければならない。かといって、ここまで来て人に赤旗を立ててくれと頼むわけにはいかない。われわれは何としてもあの議事堂を占領しなければならない。これは祖国がわれわれに与えた任務であり、他のどの部隊にも譲ることのできないわが師団の栄誉である——

彼が話を終えると、兵士たちは我がちに立ち上がった。

「師団長同志、早く命令を下してください。一気にやりましょう」

軍人たちの血が湧いた。それ以上待つ必要はなかった。

師団は総攻撃をかけ、ついに国会議事堂のいただきに赤旗を立

てた。最後の決戦を前にしてのアジ演説が功を奏したのである。
軍人大衆の心を揺り動かし、彼らの精神力を遺憾なく発揮させるところに革命軍の不敗性の源泉があり、威力があるのである。
これまで朝鮮人民軍は、軍隊の政治的・思想的威力を高めることを戦闘力強化のキーポイントと見なし、軍人たちを領袖決死擁護の精神と愛国心で武装させるための思想教育活動に第一の関心を払ってきた。朝鮮人民軍は、帝国主義が残っている限り戦争の危険は絶対になくならず、平和もあり得ず、必ずいつかは戦争をしなければならないということを常に強調している。同時に、すべての軍人が有事の際に1階級以上の職務を遂行できるように万全の準備を整えている。
武力装備の現代化は軍事力強化のキーポイントである。今日、朝鮮人民軍の陸海空軍の武力装備はすべて現代化されている。特徴的なことは、すべての武力装備が国産化されており、朝鮮の地形に合わせて軽量化されていることである。
武力装備の現代化に関して一つ付言しておきたいことは、今、朝鮮のミサイル開発の問題について、世界が疑惑と感嘆の入り混じった微妙な反応を示していることである。
朝鮮のミサイルはすでに世界に大きな衝撃を与えた。朝鮮は大陸間弾道ミサイルの生産能力をも備えているとするむきもある。事の真偽はさておき、人民軍の現代化水準は世界でも屈指の軍事先進国の水準にある。
現代戦は立体戦である。現代戦においては前線と後方の明確な区分がなく、開戦と同時に全国が戦場と化する。全人民の武装化

と全国土の要塞化を内容とする全人民防御システムの威力は、こうした現代戦に最も効率的に対応しうる防御システムである。

世界には全人民の武装化を国防の原則としている国がないわけではない。たとえばスイスやイスラエルなどでは、全国民が銃をとる民兵制度を確立している。しかしそれは、朝鮮の労農赤衛隊や赤の青年近衛隊とは、その性格と水準において質的な違いがある。スイスの場合は民兵を小銃で武装させて戦時動員体制に網羅しているが、朝鮮の労農赤衛隊は独自に現代戦に投入されて戦闘に参加できるよう、軍事指揮システムを確立している。朝鮮の民間武力、労農赤衛隊がいかに鍛えあげられているかは、昨年の9月に平壌で行われた労農赤衛隊の閲兵行進と武力装備の示威を見てもよく分かる。

朝鮮戦争の時、朝鮮では坑道化の経験を一般化させて、前線地帯と海岸、内陸を包括するあらゆる所に坑道化された防御施設を構築した。今日、軍事防衛の見地からして朝鮮の姿は「ハリネズミ」にたとえられている。それで米国は、自国の強大な軍事力を誇示するかのように、中東とアフガニスタンでは戦争の相手国を一挙に粉砕したが、朝鮮ではそうはいかなかった。1968年の武装情報収集艦「プエブロ」号事件の時にも、1969年の大型偵察機「EC―121」撃墜事件の時にも、1993年の朝米核対決の時にも、ハリネズミに手も足も出せずに困りはてている猛獣の姿をさらけ出したのである。

以上が、政治における自主、経済における自立、国防における自衛が徹底的に実現された朝鮮の社会主義の姿である。

金日成主席によって朝鮮式社会主義の戦略的路線となってきた自主、自立、自衛の原則は、金正日総書記によって世紀を継いで強盛国家建設においても変わることなく堅持された。

3　人民が主人となった国

「どこへ行っても人間を考えるんですね」、これは、朝鮮を訪問して帰ったある在米朝鮮人が著述した図書の題名である。

彼が正確に見て表現したように、朝鮮の社会主義は人間を最も大事にし、人間の尊厳と価値を最高の高さで輝かす現世の地上の楽園である。

朝鮮の社会主義を理解するうえで、「人間本位」「人民大衆中心」という言葉がよく出てくるが、こうした表現はともすれば生活からかけ離れた純然たる学術的な専門用語のように感じられる。しかし、朝鮮人民にとってこの表現は彼らの運命、彼らの生活と直結した最も重要かつ心安い言葉となっている。

朝鮮の社会主義においては、人民があらゆるものの主人となっており、社会のすべてのものが人民に奉仕している。そして、数千年来搾取と抑圧の対象となっていた人民を歴史の主体、最も力のある存在として押し立てている。

朝鮮では国号も「人民共和国」、政権も「人民政権」、軍隊も「朝鮮人民軍」である。人民大学習堂、人民文化宮殿、人民病院、人民教員、人民俳優など大記念碑的建造物の名称も、最も高い名誉も「人民」という言葉と結びつけて呼ばれている。

「以民為天」すなわち人民を天の如く見なすというこの言葉がまさに、金日成主席の持論であり座右の銘であり、朝鮮の党と国家建設の根本理念である。

「以民為天」の思想は、人民は世界の主人、歴史の主体、自分の運命の主人という哲学的認識から、人民の上に君臨するいかなる存在も否定する真の人民崇拝思想である。それはまた、人民の力を世界の発展と歴史の進歩、人間の運命を決定する絶対的な力と信じ、その力の前では不可能はあり得ないという信念として表われる。

したがって、人民に奉仕することは朝鮮の社会主義での第一の政治活動原則、政治倫理となるのである。要約して言えば、人民を天の如く見なし、万事を人民に依拠して解決し、常に人民のために献身するのが朝鮮の社会主義である。

「司令官も人民の息子」だと謙遜して抗日戦の全期間、民族と人民のために献身した金日成主席は、社会主義政権を打ち立てた後、政権機関が人民の生活に責任を持つ戸主になるよう導いた。

朝鮮式社会主義のもとで人民的施策がどのように勤労者の生活を向上させているかは、失業問題が全然存在していないことを見てもよく分かる。

失業がないということは、言い換えれば、経済が多角的に発展し生産部門とサービス部門が拡大されて、労働力が恒常的に必要であることを意味する。しかし、失業問題が全然存在しないということは、単に経済発展水準とだけ関係していることではない。正直な話、経済発展水準について言うなら朝鮮の経済は今なお世

界の先進諸国の水準には至っていない。それでは、朝鮮ではどうしてどの社会主義国も資本主義国も解決していない失業問題を完全に解決することができたのであろうか。それは朝鮮の党と政府の人民的施策と関連している。事実、自分の労働で生活に必要な費用をまかなわなければならない勤労者の場合、職業は生存と直結する重要な問題であり、そういう見地から見るとき、朝鮮で失業問題がないというのは、資本主義社会では到底理解することも実現することもできない不可思議なことである。

朝鮮式社会主義下で国家の人民的施策と関連する措置のうち、また強調すべきことは税金の完全な廃止である。

朝鮮は世界で初めて税金を完全に廃止した国である。

税金の完全廃止に関する法令は1974年3月、最高人民会議第5期第3回会議で採択され、4月1日から施行されている。税金の歴史を専門に研究してきたある国の社会学者は、「歴代、税金が収入の35%を越えれば、農民はくわの先を地に向けず国の方に向けた」と言っている。税金が人間の生存と生活に及ぼした弊害に対する適切な比喩だと言える。それで、人々は遠い昔から収入の10分の1だけ納税することを生活の理想としてきた。このように税金の完廃については考えることすらできなかったのであるが、朝鮮人民はすでに40年間も税金のない別天地で何の心配もなく暮らしている。

朝鮮人民が失業や税金、学費、治療費など、資本主義社会では恒常的に人間の生存を脅かす要因についてよく知らないということは、決して作り話ではなく、実際に朝鮮に来てみた人であれ

ばたやすく分かる常識的なことである。1滴の水に宇宙が映されるという言葉の通り、これは、朝鮮の社会主義は名実ともに人民中心の社会であり、人民が主人となった国だということを示している。

事実上、資本主義社会で暮らす人にとっては、税金が全然ないという朝鮮の現実をそのまま信じられないかもしれないが、彼らが信じようと信じまいと、朝鮮では税金という言葉すら知らずに育った世代が今日強盛国家建設の主人となっている。

朝鮮式社会主義下で人民的施策と関連して必ず知らねばならぬことは、世界的に最もすぐれていると言える無料治療制と無料義務教育制である。

現在、朝鮮での勤労者の月給が資本主義諸国での日常的な名目賃金水準に比べて非常に低い水準であることは間違いない。にもかかわらず、朝鮮の勤労者はみなその月給をもって何の心配もなく平等に生活している。

その秘訣をさぐってみると、勤労者の衣食住と医療、教育など基本的な生活の問題を国家が全的に保障しているからである。朝鮮ではすでに久しい以前から無料治療制と無料教育制が実施されており、食糧は国家専売制によって無料に近い価格で供給されている。住宅は国家が建てて無料で提供するため、朝鮮人は家賃というものを全然知らない。ただ電気や水、暖房の使用料を出すが、これはほとんどただに等しい。こういう点を考慮してみるとき、朝鮮での勤労者1人が1カ月間生活するのに要する費用はごくわずかにすぎない。

朝鮮での無料治療制は診察から治療、入院、手術、処方に至るまで文字通り一文の金も出していないということにも驚くべき点があるが、そのような施策が平和的時期でもない朝鮮戦争の時期（1953年）に公布され、今までほぼ60年間一度も中断されることなく施行されてきたということでいっそう感服させられる。

朝鮮での住民1万人当たり医師の数はすでに1960年代に16人で、世界的に先進水準にあり、保健医療部門に対する国家の投資は毎年系統的に増えている。すべての住民は医師区域担当制によって一定の所帯と職場別に分割され、病気のあるなしに関係なく年に2度ずつ定期的に健康診断を受けている。結局、すべての住民はそれぞれ自分の主治医をもっていることになる。朝鮮での医療活動の基本的方針は予防医学である。それは人が病気にかからないようにあらかじめ対策を立てるということである。分かりやすく言えば、患者が医者を訪ねるのでなく、医者が住民を訪ね歩き、病気にかからないように検診し治療するということである。これは人を最も大事にし、人のためにすべてを奉仕させる朝鮮の社会主義の本性に根差すきわめて自然なことである。資本主義社会では到底考えられないことである。現在朝鮮では、人々の平均寿命は解放前の38歳から74・5歳と2倍に伸びており、医師たちは真心をこめて住民の健康を見守っている。

朝鮮で無料義務教育はすでに戦後の時期から部分的に実施され、1959年4月からは全般的無料義務教育が実施されている。朝鮮では遠く離れた灯台島や山間村の子どもたちももれなく教育体系に網羅されており、都市の子どもと同じように制服や学用品

を常時供給され、思う存分学んでいる。朝鮮の教育制度で目につくのは、学齢前子どものための教育システムである。全国的に約10万の託児所と幼稚園が設置、運営されているが、ここでは数百万の子どもが元気に育っている。世界で義務教育を実施している国はあるが、朝鮮でのように学齢期の児童だけでなく学齢期以前の子どもまで勉強させ、大学、専門学校の学生には奨学金まで与えて勉強させる国はまずないであろう。

朝鮮の社会主義の人民的施策を示すこうした実例は数多い。朝鮮では経済建設と国防建設の過重な負担を担って社会主義建設を進めながらも、医療および教育など人民生活にかかわる部門に対しては投資を惜しまない。もちろん朝鮮は、数百億ドルの国内総生産高や人口1人当たり数万ドルの国民所得を誇るほど豊かな国ではない。しかし、人民生活に関しては収支勘定を先立たせず、投資を惜しまないというのが金日成主席と金正日総書記の意志であったし、朝鮮労働党と政府の立場である。それゆえ、朝鮮人民がこのような社会主義制度を自分の生命のように大事にし、擁護するのは至極当然なことだと言える。

三　強盛国家をめざす朝鮮

金正日総書記の逝去後、朝鮮ではいま1人の天が賜った偉人である金正恩（キムジョンウン）同志の先軍政治に従って全軍、全人民が強盛国家を建設するための総進軍に奮い立っている。

金日成朝鮮の100年史を総括し、新たな100年代が始まった現時点で、朝鮮が政治、軍事、科学技術、経済と文化の各面で強盛国家の地位に浮上したことを称賛する人々は少なくない。

しかし、他方では現在朝鮮が見舞われている経済的難関と緊張した情勢に関して、今なお懐疑と憂慮の念を隠し切れない人々も多い。とにかく朝鮮は見る人によって現時点で強盛国家だとも言えるし、まだ強盛国家に向かう途上にある国だとも言える。

しかし、いずれにせよそれは重要なことではない。明白なことは、朝鮮は最初から強盛国家をめざしてきたし、この数十年間強盛国家を建設しながら積み上げた貴重な経験と土台がある限り、やがては必ず強盛国家になるということである。

1　強盛国家建設は金正日総書記の崇高な構想

古代ギリシアの哲学者アリストテレスは政治指導者を「船長」になぞらえたことがある。船長がその役割を果たせなければその船は漂流せざるを得ないように、政治指導者が正しい理念と戦略

を持たなければ大衆は右往左往するようになる。それゆえ、政治指導者はその船が向かう目的地と方向を確かに知っていなければならず、その船の櫓をこぐ人たちが同じ方向に船をこいでいけるように説得し指揮できなければならない。

朝鮮を社会主義強盛国家に建設するのは偉大な金日成主席の生前の志であり、敬愛する金正日総書記の遠大な構想、戦略的目標であった。

金正日総書記は、最も厳しかった「苦難の行軍」の時期、金日成主席の終生の念願であった強盛国家建設の雄大な目標を示し、超人的な精力をもって人民あげての進軍を陣頭に立って導いた。革命的生涯の最期の瞬間まで強盛国家建設の主要部門や最前線の営所、全国津々浦々を縦横無尽に現地指導した金正日総書記の献身的な労苦によって、朝鮮における強盛国家建設は、その大門を開く画期的局面に確固と入っている。

金正日総書記の先軍政治により、かつて大国の角逐の場となって波瀾万丈の運命を強いられた朝鮮は、今日、一心団結という精神力と核兵器を持った政治・軍事強国となり、最先端突破戦によって新世紀の産業革命を起こしていく経済・科学技術強国を建設している。

金日成主席が開拓し、金正日総書記が強固な基礎を築いた朝鮮での強盛国家建設偉業は、今日、金正恩同志によって確固と継承され、成功裏に推進されている。

強盛国家、それは決して領土の大きさや人口に正比例する概念ではない。領土は小さく人口は多くなくとも、政治と軍事、経済

と文化のすべての面で国力が最上の水準に達し、人民がみな幸せな生活を営む国が強盛国家である。

歴史をさかのぼってみれば、強大国として名声をとどろかせた国も少なくない。古代マケドニアのアレキサンダー大王が打ち立てたバルカン帝国、ヨーロッパ全域を支配したローマ帝国、中世期ジンギスカンが騎馬大軍でユーラシア大陸の広大な地域を占領して打ち立てたモンゴル帝国、永遠に日が沈まないといった近世の大英帝国などがその実例である。しかし、侵略戦争によって強奪した他国、他民族の領土と資源をもって虚勢を張る国は決して大国になることができず、やがて崩壊の運命を免れなかった。それは歴史が定めた必然的な宿命とも言えるものであった。

どの民族であれ自国が強くなることを願い、どの政治家であれ強力な国家建設を志向する。しかし、それは決して望むからといっておのずとなされるものではなく、また誰がしかがもたらしてくれるものでもない。それはただ自国人民、自民族の力を信じ、自国の大地に自国の資源と技術をもって自分のやり方で建設しなければならない。

朝鮮で強盛国家建設の青写真が示され、その実現が本格的に始まったのは1990年代の末期からである。

当時について言うなら、朝鮮人民が金日成主席逝去後に生じた最悪の逆境を決死の意志と闘争によって打開し回復期にさしかかっていた時期であった。

1990年代に入り、米国をはじめ西側の極右翼勢力は「核疑惑」をはじめ様々な名目で制裁と封鎖のわなをしかけて締めつけ、朝

鮮を完全に孤立させ圧殺しようとした。彼らは経済状態が困難をきわめ人民の生活が窮乏に陥った状況下で社会主義がおのずと崩壊するものと見込み、共和国に対する圧殺政策に狂奔した。かてて加えて暴雨と大かんばつ、台風と津波が交互に年々来襲して朝鮮の経済と人民の生活に重大な打撃を与えた。当時ある外国の記者は、災害を受けた朝鮮のある被災地域を見て回り次のように書いた。「海と化した載寧（チェリョン）平野には牛の飼料にもならない腐った稲だけが残り、コンクリートの橋は半分が流失し、学校は跡形もなくなり、ポプラの並木は根ごと押し倒された。それこそ廃墟であった。相当な数の民家や施設物があったに違いない宅地には倒れた柱、ドラム缶、れんが、コンクリートのかけら、屋根の鉄骨などが無数に転がっていた」

自然災害後の燃料難、原料難、動力難は経済の沈滞を招いた。採炭されて積み上げられていた多量の石炭が流失し、数多くの炭鉱切羽の浸水により採炭ができなくなって火力発電所の正常稼働が不可能になり、日照りで底が尽きた貯水池は水力発電所の操業をできなくした。経済の動脈である鉄道が正常に運行されず、工場、企業が操業できず、基本的な生活必需品さえ満足に生産、供給できなくなり、首都の街や住宅への電力供給さえ中断された。なかでも最も苦しいのは食糧難であった。多くの人たちが粒トウモロコシと草がゆで飢えをしのぎ、それもなければ「代用食品」をつくって食べなければならなかった。

こうなると西側の列強は待っていたとばかりに、朝鮮での社会主義の崩壊は時間の問題だと宣伝しはじめた。

厳しい試練と難関を前にした金正日総書記の心中は言いようもなく重かった。だからといって誰かに救援を求めることもできなかった。金正日総書記はついに乾坤一擲、「苦難の行軍」を断行してこの難局を打開していくことを決心した。

金日成主席は生前、試練と難関が立ちふさがるたびに、抗日革命戦争期の最も困難な時期だった1930年代末期の苦難の行軍についてしばしば追憶した。苦難の行軍とは金日成主席が抗日戦の時期、朝鮮人民革命軍の主力部隊を率いて1938年12月初から翌年3月末までの100余日間、中国東北地方の濛江県南牌子から長白県北大頂子へ行軍したことを言う。当時、日本軍は中国の占領地域を拡大するため後方、特に東北地方のより強固な安定を図るため、金日成主席の率いる朝鮮人民革命軍を撃滅すべく各種の討伐作戦を強化していた。一方、朝鮮人民に抗日部隊は全滅したという宣伝攻勢を強化して彼らの抵抗精神をなくそうとしていた。いずれにせよ人民革命軍の側からすれば厳しい情勢であり、兵力を維持するため密営で酷薄な冬期を過ごすこともできた。しかし、主席は苦難の行軍という最も困難な道を選んだ。長白県北大頂子は鴨緑江沿岸にあり、その対岸は朝鮮の茂山(ムサン)地区である。茂山地区に進出して反撃の銃声を響かせることによって、朝鮮人民革命軍と朝鮮人民は生きており、日本帝国主義と戦えば必ず勝利するという希望を抱かせることに苦難の行軍の目的があったのである。しかし、それは文字通り苦難を乗り越えねばならぬ苦しい行軍であった。徒歩で5～6日かければ行き着ける距離を100余日もかけて行軍したのである。

後日、金日成主席が回想したように苦難の行軍の内容を一言で要約すれば、それは厳しい自然とのたたかい、極限の食糧難と疲労とのたたかい、恐ろしい病魔とのたたかい、凶悪な敵とのたたかい、これらすべての苦難に打ち勝つための自分自身とのたたかいが一つにからまったものであった。

あれほど困難をきわめた苦難の行軍の時期、抗日革命先達が高く発揮した徹底した革命精神、不屈の革命精神で全人民を武装させ、難局を打開しようというのが金正日総書記の意図であった。

このように「苦難の行軍」によって逆境を順境に変えた金正日総書記は、次いで人民に強盛国家建設というより高い目標を提示した。

では、総書記はなぜあれほど苦しかった「苦難の行軍」の時期に最も雄大な強盛国家建設の戦略を練り、その準備を進めてきたのか。

昔から、人が災難にあえば3日の収拾期間が必要であり、家族が災難にあえば3カ月の収拾期間が必要であり、国が災難にあえば30年の収拾期間が必要であると言われている。

しかし、金正日総書記は決して試練に耐えるだけでは「苦難の行軍」で勝利したと自負することができなかった。当然、朝鮮を世界にそびえ立たせ、いかなる強敵も見下ろすことのできない最強国にすること、これが金正日総書記の意志であり決心であった。苦難が重なるほどいっそう奮発して前進する攻撃精神の体現者である総書記はついに、全人民、全軍を強盛国家の建設に呼び起こした。朝鮮が生きるか死ぬかという厳しい時期に、苦難を

はねのけて強盛国家建設という巨大な目標を示した総書記の決断力と政治力はいま一度世界の耳目を集めた。

日本のある人士は自分の文にこのように称賛した。

「ロシアの著名な作家アレクセイ・N・トルストイは力作『苦悩の中を行く』第2部『1918年』の初めにこんな詩を据えた。

3度水に洗われ
3度血にひたされ
3度灰汁につけられたがゆえに
われらは誰よりも清潔であろう

この詩を思うたびにわたしは、共和国の人民がこう答えるような気がする。

『血涙の大河も渡り、〝苦難の行軍〟の苦しい試練も乗り越え、帝国主義の孤立圧殺も粉砕したのだから、われわれは誰よりも強い』

この世の多くの人たちは今日になってはじめて、金正日総書記は共和国が最も困難であったあの日々に何のために決然と『苦難の行軍』を決心し、あのむごい試練を先頭に立って乗り越えてきたのかを改めて吟味してみている。そして金正日総書記の自主政治のもと鋼鉄の如く打ち固められ、鉄のように団結した共和国の人民が21世紀の初葉に必ず強盛大国を打ち立てるであろうことを信じている」

彼の予言は外れなかった。今日朝鮮は、金正日総書記の唯一の後継者である金正恩同志の先軍政治のもとに政治・思想強国、軍事強国の威容をとどろかし、経済・科学技術強国の高峰をめざ

して力強く前進している。

2　強盛国家建設の大本――一心団結

古くから朝鮮人は農業を天下の大本といって農業に専念してきた。

金正日総書記は強盛国家建設の大本は一心団結だと述べている。強盛国家の建設において一心団結が最も重要であり、根本の根本であるという意味である。事実上、強盛国家の第一の国力はほかならぬ人民の精神力、その中でも指導者と人民が一つの思想と意志、一つの運命に固く結ばれた一心団結だと言える。

朝鮮で指導者と人民、軍隊間の一心団結はすでに金日成主席の代に形成され、それは金正日総書記によってより高い段階に強化され発展した。一心団結こそは朝鮮特有の姿であり、核兵器よりも強力な最強の武器である。

今日、米国とその追従勢力が膨大な武力を動員しながらもあえて朝鮮を侵すことができないのは、朝鮮に強力な核抑止力があることにもよるが、それにまさる強力な一心団結があるからである。

この一心団結は一体どこに基礎をおいており、その原動力は何か。

朝鮮の一心団結がどんなものであるかを示す一つの逸話がある。

2001年7～8月に金正日総書記は20日間余りロシア連邦を訪問した。

この期間、祖国の人民は寝ても覚めても総書記の健康と安泰を

願い、出張に出た父親を待つ子どもの気持ちで総書記が帰る日を待ちわびた。日中には金正日総書記が帰国すれば喜んでもらえるように一つでも多くの仕事をし、晩にはテレビの前に座って総書記の精力的な活動状況を視聴しながら恋い慕った。職場でも家庭でも、話題は総書記のロシア訪問に集中した。

ロシア訪問を終えて帰国した総書記は、わたしはロシア訪問の全期間、祖国と人民を一時も忘れたことがない、祖国の人民がわたしを思ったように、わたしも人民と兵士たちを思ったとし、「わたしはロシアに行っているあいだ祖国の人民を思い恋しがり、祖国の人民はロシアに行っているわたしを思い恋しがりましたが、これがまさに指導者と人民の渾然一体です。革命的同志愛にもとづく指導者と人民の渾然一体はチュチェ朝鮮の真の姿です」と述べている。

実に総書記のロシア訪問の日々は、朝鮮こそは指導者と人民が運命をともにする不抜の一心団結の国であることを全世界に誇示した意義深い日々であった。

こういうことはそれから10年すぎた2011年8月に行われた総書記のロシア連邦極東およびシベリヤ地域と中国東北地域訪問時にもあった。

朝鮮での指導者と人民との関係は、生死をともにする革命同志間の関係であり、同じ血筋を引いた親子の関係である。

ここに一つの数字がある。15万3110通。

これは1995年1月から2003年2月までの間に金正日総書記が人民から寄せられた手紙を見た総件数である。

これは総書記が毎日平均50余通の手紙を見たことになる。これらの手紙はみな、平凡な人民軍兵士、労働者、農民、青少年から寄せられたものであった。党と国家、軍隊の活動全般を指導する多忙な総書記であったが、人民の真心のこもった手紙は残らず見て直筆の回答も送った。

朝鮮の一心団結は、金正日総書記と兵士との肉親的関係においてもうかがうことができる。

1995年2月のある日の話である。この日、東海岸に位置する女性海岸砲中隊を視察して宿所に戻ってきた総書記は夕刻数名の幹部を呼び、翌朝その女性中隊にもう一度行って軍人たちの生活実態を具体的に調べてくるよう指示した。翌日、幹部から報告を受けた総書記は、昨日多くの人がわたしと一緒に女性海岸砲中隊を訪問したが、軍人たちが潮風に当たって顔が荒れているのを見ても胸を痛めていない、医者からあかぎれに効く薬用クリームと膏薬をもらって明朝直ちに届けるようにと指示した。

このように情があつく親しみ深いので、朝鮮人民は総書記を指導者としてよりも父親として慕ったのである。

昨年末、思いがけなく金正日総書記を失った朝鮮人民が哀悼期間に総書記を追慕した姿は世界中の人々を感動させた。

それは、志と情によって結ばれた金正日総書記と朝鮮人民の間の血のつながりがいかに強く、朝鮮人民の徳義心がいかに気高く真実なものであるかを雄弁的に示した。

数年前、大洪水のため新義州(シンイジュ)地区が多くの被害をこうむったときのことである。被災地を見て回っていた外国人が崩れた家屋の

あたりで什器類を拾い集めている老人に「ご老人、これからの暮らしが大変ですね」と問いかけたことがあった。

老人は彼の問いに「大変だなんて、わたしはそんな心配はしませんよ」と答えた。外国人はいぶかしげにまた「家が崩れてしまったのに心配しないというのですか」と問い返した。

「家は崩れたが心の柱はしっかりしていますよ」

「心の柱？」

「うちの将軍さまがいるじゃありませんか。将軍さまがいれば何の心配もありませんよ。見てみなさい。いまにわしらがもっとよい暮らしをするようになるから」

老人の言葉は決してうそではなかった。

総書記は軍隊を動員して彼らの生命を救ってくれただけでなく、元の家より何倍も大きな家を建て、家財道具一式を整えてくれたのである。それだけではない。いつか大紅丹（テホンダン）郡総合農場の除隊軍人村で新婚生活をしていたある主婦は思いもよらぬ総書記の訪問を受けたとき、やがて生まれる子の名前をつけてほしいというお願いをした。その主婦は、総書記が両親よりも自分たちの生活に心を配ってくれるので、実の父親と思って何のためらいもなく申し上げたのだった。総書記はおおらかに笑って、男の子か女の子かも分からないのにどのように名前をつけるのか、後で名前をつけてあげると約束した。その日の晩、総書記は、もともと子どもの名前は父親がつけるものだが、わたしがつけることにしようと言い、除隊軍人の妻の願いであるから、彼らの未来を祝福する意味で「男の子であれば大紅（テホン）とし、女の子であれば紅丹（ホンダン）とす

るのがよさそうです」と述べた。そしてこの二つの名前を合わせれば大紅丹となるが、父親の姓が閔（ミン）氏だから男の子であれば閔大紅、女の子であれば閔紅丹と呼べば意味があってよいだろうと述べた。総書記はつづけて、その主婦をはじめ除隊軍人の妻のうち出産することになる女性たちのため、平壌産院で移動奉仕医療隊を編成し、大紅丹郡に出向いて出産の世話をするようにと指示した。

　これが、指導者と人民が断ちがたい血縁的関係で結ばれている朝鮮の渾然一体なのである。

　金正日総書記は金日成主席の逝去という大きな喪失と悲しみの中で寝食を廃したそのときにも、前線の山村で生まれた三つ子の生命を救うため即時ヘリを飛ばし平壌産院に入院させて蘇生させた。人民が望むなら空の星をも取り、石の上にも花を咲かせるというのが総書記の意志であり、人民の幸せのためなら幾千夜を明かすのも喜びとするのが総書記の愛情であった。

　金正日総書記はいつも人民の中にあって人民と苦楽をともにし、彼らにありとあらゆる愛と信頼を注いだ。畑へりで農民と農事を相談し、道行く老婆に国策を問い、彼らの素朴な考えも政策に盛り込んだ。軍部隊を視察しては兵士たちの父親となって故郷の便りも伝え、工場へ行っては労働者たちの油のにじんだ手を握り、生産と生活についての彼らの意見も聞いた。そして岩水がしたたり落ちる水路トンネルや坑の切羽まで入って建設者や炭鉱夫の人知れぬ苦労をねぎらった。こうした愛と信頼があるがゆえに、朝鮮人民は自己の指導者にかくも忠実だったのである。

ある年、朝鮮西海の海上でビニールで包んだ物が入っている二つの浮き袋を発見した。1滴の水もしみこまないように幾重にも包装された包みの中には金日成主席と金正日総書記の肖像画と、船に乗っていた人たちが最期を前にして書いた2通の手紙が入っていた。

手紙には、航行中台風に見舞われた船員たちが最後の瞬間まで『金正日将軍の歌』をうたって決死の覚悟でたたかったことと、総書記の健康を祈るという彼らの切なる願いが記されていた。これがまさに金正日総書記の愛と信頼の政治が生んだ朝鮮の一心団結である。朝鮮のこの一心団結は今日、金正日総書記の唯一の後継者である金正恩同志によっていささかも動揺したり変わることなく確固と継承、強化されている。

今日、西側の政客が理解に苦しんでいるのは、朝鮮社会に対立する政治勢力がないということである。彼らが朝鮮に来て、仁徳の政治風土で指導者と人民大衆が渾然一体となった現実を目撃するなら、新たな「答え」を得るであろう。

金正恩同志と人民が渾然一体となり、金正恩同志のまわりに固く団結した朝鮮人民の一心団結こそは、世界のどこにも見られない朝鮮の現実であり強盛国家の第一の国力である。

3　封鎖を打ち破る自力更生の戦略

自力更生によって強盛国家を建設するというのは朝鮮の党と政府の変わりない国家建設戦略である。自分の力、自分の資材、

自分の技術により、自分の実情に即して推進する国家建設の戦略、言い換えれば自国人民大衆の力によってすべてを解決していくこと、これがまさに強盛国家建設の自力更生戦略である。

他人に頼り、人のおかげで豊かな暮らしをしようというのは愚かな妄想である。朝鮮のことわざに、他人の家の金塊より自分の家の鉄塊がまさるというのがある。真に富強で永遠に繁栄する強盛国家は自民族、自国人民と運命的に結合した自力更生の国である。それぞれの国と民族は自力で富強、繁栄する強国を建設するとき、人民の幸せと未来のための基盤を持つことになり、祖国に対する熱烈な愛着と決死守護の意志も生まれることになる。人民と同一の運命によって結合した自力更生の強国こそは最も強固で前途洋々たる強国である。自力更生の強国、これが強盛国家の本態である。

朝鮮の自力更生戦略において基本をなすのは、経済の主体化、現代化、科学化を実現することである。

経済を主体化するというのは、自国の資源と自分の技術により、自国の実情に即して経済を建設し発展させるということである。経済を現代化するというのは、立ち後れた技術と設備を先進的なものにとって代えることを意味し、経済を科学化するというのは、科学技術を発展させてすべての部門の生産と経営活動を新しい先進科学的土台の上に引き上げることを意味する。

朝鮮の自力更生戦略と関連して必ず明確にしなければならない問題は、経済の主体化と現代化、世界化に対する理解だ。すなわち今日のような情報産業時代に主体性と世界性が共存できる

のか、主体のない世界化の船はどこへ流されるのかということである。

自力更生の原則で自立的民族経済を建設するというのは、決して門戸を閉ざして経済を建設するということではない。

科学と技術、情報がほぼ同時に世界の隅々にまで浸透している現時代に、経済の世界化という概念は現実に対する度を越した単純化である。今日、世界には国ごとに民族的不平等と経済発展条件の不同一性、科学技術発展の不均等性、ひいては価値観と開発政策の差が厳然として存在している。こうした状況にあって、発展途上諸国が経済の現代化のために向こう見ずに世界化の方向に進むならば結局、限界なき競争が支配する世界資本のジャングルの中に自ら飛び込んで大国の餌食になる破滅的な運命を免れなくなる。

経済の世界化の風が吹きまくっている今世紀に至っても、朝鮮が世界化と現代化よりも主体化を確固と優先させているのは、数十年にわたる社会主義建設の経験と教訓があるからである。

周辺の大国の間にあって歴史的に支配と干渉という骨身にしみる試練を経なければならなかったし、今日に至ってもそうした大国の重圧の中で独自に社会主義を建設しなければならない「小さい国」朝鮮の立場では、主体性という絶対的な原則がなくては強盛国家の建設はおろか民族の尊厳も守れないというのが打ち固められた信念である。

それゆえ、朝鮮で収められたすべての経済成果はほとんどチュチェという言葉とともに評価されている。冶金界での革命と言え

る非コークス製鋼法で鉄鋼を生産するシステムもチュチェ鉄生産システムと呼び、石から生産したビナロンもチュチェ繊維と呼んでいる。

2009年12月、金正日総書記はチュチェ鉄生産システムを完成させた朝鮮屈指の鋼鉄生産基地である城津（ソンジン）製鋼連合企業所を訪れた。

チュチェ鉄とは、輸入コークス炭を全然使わず、朝鮮に無尽蔵な無煙炭を燃料にして生産した鉄のことである。

朝鮮でチュチェ鉄生産システムを完成させるための事業は以前から進められてきた。金日成主席は早くから、チュチェ思想を信奉する人ならチュチェ鉄を生産しなければならないとし、朝鮮式の製鉄製鋼法の完成のために労苦と心血を注いできた。

チュチェ鉄の誕生を一日千秋の思いで待ち望んだ金日成主席の遺訓は金正日総書記の賢明な指導によって立派に実現した。金正日総書記は早くから金日成主席の意を体してチュチェ鉄を朝鮮鋼鉄工業の「種子」に、自立的民族経済の生命線とし、朝鮮式の製鉄製鋼法を完成させるための民族史的偉業を陣頭に立って指導した。

最近朝鮮では、金正日総書記の自力更生の戦略が立派に実現することによって、帝国主義者の封鎖が完全に粉砕され、経済強国の兆候とも言えるすばらしい出来事が相次いで起こって世界の関心を呼んでいる。城津製鋼連合企業所でのチュチェ鉄生産システムの完成についで楽元（ラクウォン）機械連合企業所ではガス化工程に必要な1万5000立方メートル能力の大型酸素分離機を自力

で製作した。また化学工業部門の科学者、技術者、労働者は、「苦難の行軍」が始まって以来16年間操業できなかった2・8ビナロン連合企業所を自らの技術によって近代的技術に改造し、チュチェ繊維であるビナロン繊維の生産工程を現代化した。

2010年2月、近代的生産工程を備えた2・8ビナロン連合企業所を訪れた金正日総書記は、羽毛のようにやわらかくふくよかな白いビナロン綿を手にとり、顔をほころばせて長いこと見つめ、ビナロン綿は木綿や羊毛に劣らぬ立派な紡績原料だと言って、チュチェ綿が大量に生産されていることに大満足した。

朝鮮人民は大自然改造事業でも奇跡を起こしている。それはほぼ一つの郡に相当する大渓(テゲ)島干拓地の建設を行ったことを見てもよく分かる。今後、黄海(ファンヘ)南道の竜媒(リョンメ)島干拓地まで建設されれば、おそらく朝鮮の西海岸地帯は地図を描き変えなければならないほど大きく変わるであろう。

これらの変遷は、まさに朝鮮人民の自力更生の精神が生んだものである。

朝鮮人がよく使う言葉の中にはこういう内容の言葉がある。「上から供給してくれればよし、供給してくれなくとも自力で解決する。不足するものは探し出し、ないものはつくり出してでも必ず課題を遂行する」、これは、自力更生が人々の実生活に具現された一つの標語である。

このように自力更生は、朝鮮人の日常的な思考と行動において一つの習慣のようになった。自力更生を気質に、精神力にする朝鮮人民にとって停滞と因循はあり得ない。

停滞と因循は条件が不利であることにあるのでなく、自力更生精神の欠如にある。ざるに水というたとえの通り、自力で立ち上がろうとする精神がなければ、たとえ「黄金の雨」が降り注いだとしても何の用にもならない。他人の助けを受けて栄えようと期待するなら、ある知恵も眠り込み、すぐれた才能も埋もれてしまうものである。いくら無尽蔵な潜在力を持っているとしても、それを分かりもせず、発揮することもできなくするのがほかならぬ外勢依存の弊害である。外勢依存は自分の手足を自ら縛りつける愚かな行為である。他より有利な条件があるとしても、自分の力を信じ自力更生しなければ永遠に立ち遅れと貧困から抜け出すことはできない。

今、朝鮮の自力更生戦略に対する世界の評価には二つの見解が見られる。

その一つは、自力更生こそは植民地状態から抜け出した後進国が選択すべき最善の国家建設戦略だと称賛する見解であり、他の一つは米国をはじめ西側世界が下している「閉鎖的」だと非難する見解である。

自力更生戦略が閉鎖的だという評価は、国際社会との経済取引を拒んでいるということを論拠としており、西側が反社会主義、反共和国的非難に用いている常套的手法である。厳密に言えば、朝鮮が外部世界との接触を拒んでいるというよりは西側世界、特に米国が朝鮮の孤立を強要し、数十年間封鎖戦略を実行してきたというのが正確であろう。

もちろん今日、人類が創出したすべての科学技術的成果と経験、

経済的・文化的財貨を共有し互いに交流するのは社会発展のためにきわめて有益かつ重要なことである。しかし、それも確固たる自分の立場に立って行うべきであって、そうしなければかえって社会の進歩と発展を阻害する結果を招くということを現実は明白に示している。

自力更生をモットーとする国は絶対に崩壊せず、瓦解することもない。自分の土台が強固であれば他に目を配ることもなく、いかなる圧力や制裁も恐れることがないし、外部からの支援はあればよく、なくとも差し支えない。

朝鮮民族が数百年間の事大主義と外勢依存によって得たのは亡国であったが、わずか数十年間の自力更生によって得たものは強国である。

朝鮮人民が自力で必ず強盛国家を建設することができるというのは決して空論ではない。ゼロの状態から素手で強力な社会主義の堡塁を築いた朝鮮人民が、政治・軍事強国の土台の上に経済強国を建設するのは時間の問題である。

4　科学技術によって建設される強盛国家

今日、朝鮮の強盛国家建設は最先端の科学技術に裏打ちされていっそう加速化されている。

21世紀は情報産業の時代、知識経済の時代である。知識経済の時代には科学技術が急速に発展してその応用周期が非常に短くなり、科学技術と生産が一つに密着して経済が発展する。科学技

術と科学技術の隣接点から新しい科学技術が出現し、それが経済発展を急速に促すのが今日の知識経済時代の特徴である。情報産業時代、知識経済時代の強盛国家は当然、科学技術強国であるべきである。

先に立てば勝者となり、立ち遅れれば敗者の運命を免れない今日の知識経済時代に、国と民族の強盛繁栄と未来は先端科学技術を手にするか否かにかかっている。いくら豊富な資源と広大な領土を持っているとしても、科学技術を先行させずには発展することができず、結局は他人に技術的にも経済的にも縛られるようになる。

10年前、朝鮮が強盛国家建設の目標を打ち出したとき、敵対勢力は疑惑と冷笑をもって対した。発達した西側諸国も現在のような富を築くのに数百年を要したのに、今やっと経済の急降下を防ぎ回復期に入った朝鮮がどのようにして強盛国家を建設するというのか、朝鮮が西側諸国に追いつくには少なくともそれらの国の50倍の速さで進まなければならないが、これは全く不可能なことだ、と言った。ともかく朝鮮が強盛国家を建設するには既存の観念、普通の意志、他と同じ速度では到底不可能であることが明白だった。

金正日総書記はこのことからの活路を科学技術に求め、科学技術を最短期間内に発展させ、強盛国家の建設を科学技術によって保証するよう導いた。科学技術のみが後進国を先進国の隊伍に並ばせ、短い期間に強盛国家のすべての目標を達成させることができる。総書記は情報産業時代、知識経済時代の要請に即して科

学技術重視の路線を示し、すべての分野で最先端科学技術を開発するための一大旋風を巻き起こした。そして、宇宙と電子科学をはじめ科学技術分野に特別造詣が深い総書記は自らこの事業を受け持って指導した。

既存の自立的民族経済の潜在力が大きく、科学技術の蓄積水準が高く、しかも研究開発への投資が国家的に保障されている朝鮮の実情においては最先端科学技術の開発が現実的に可能であった。しかし、それにもまして朝鮮が世界的な最先端科学技術を短期間内にきわめることができると信じるのは、それを受け持つ科学技術陣容である。

情報産業、知識産業はそれこそ青春産業だと言える。頭脳明晰にして血気さかんな青年が多くてこそ情報産業の覇権を握ることができる。機械制産業時代には誰がより多くの生産手段を持っているかによって経済発展の速度と収益が決まったが、情報産業時代には誰がより聡明で前途有望な人材を持っているかによって技術発展と収益性が左右される。朝鮮では、以前から総書記の指導のもとに世界一流級の科学技術人材を養成する事業が体系的に行われてきた。彼らの大部分は20代前後の若くて前途有望な科学技術人材である。

朝鮮で初の人工衛星を開発し成功裏に打ち上げた研究チームもみな青年科学者、技術者たちだった。

人工衛星の開発、完成はもちろん、その打ち上げもやはり難しい最先端科学技術に関する問題であって、世界的にいっぺんで成功させた国はほとんどなかった。衛星技術が発展しているという

米国でも、人工衛星「バンガード」を9回目に軌道に乗せ、日本も人工衛星「オオスミ」を失敗を重ねて6度目に軌道に乗せることができた。

ところが、朝鮮はただの1回で人工衛星を正確に所定の軌道に乗せるのに成功したのである。これは、朝鮮の人工衛星打ち上げ技術が先端水準に至っていることを示す明白な証拠であった。

西側の宇宙強国も朝鮮の人工衛星打ち上げに対し青天のへきれきだと当惑感を隠しきれなかった。それは、最先端科学技術の集合体で装備された人工衛星を、困難な経済状態の中で他国の助けを受けず、自分の技術と力で製作し、それもいっぺんで打ち上げたからである。

ロシア宇宙協会副総裁のユーリ・ミロフはイタル・タス通信記者とのインタビューで、朝鮮の人工衛星とその打ち上げ技術がロシアの支援によるものだという西側マスコミの宣伝に関して、自分にはロシアの宇宙専門家と接触しようとする朝鮮民主主義人民共和国のいかなる企図も耳にしていないとし、「いかなる支援についてもわれわれは要請を受けたことがない」と強調した。

最近朝鮮では、最先端突破の象徴といわれるＣＮＣ化に関する具体的な資料が公開され、内外の関心を集めている。

朝鮮の『労働新聞』が「将軍とＣＮＣ」というタイトルで、国のＣＮＣ化の歴史が金正日総書記の決断と努力のたまものであることを具体的に伝えたからである。

金正日総書記がＣＮＣ化を構想したのは1990年代からであった。当時朝鮮は、東欧諸国での社会主義体制の崩壊、最大の痛恨

事、相次ぐ天災などによって前代未聞の試練に見舞われていた。世界の世論は、朝鮮の「崩壊」は時間の問題だとし、米国をはじめ西側諸国はそれに伴う体制変化シナリオまで作成、公開した。しかし、彼らは朝鮮の指導者が誰であり、朝鮮の社会主義がどんな社会であるのかをあまりにも知らなかった。

金正日総書記は科学的社会主義の勝利を確信し、金日成主席の意図どおりチュチェの社会主義を固守する意志を全世界に宣言した。そのとき金正日総書記が念頭においたのは、思想重視、軍事重視とともに科学技術重視であり、その中でも基本は経済のＣＮＣ化であったという。それは、最先端のＣＮＣ技術を掌握せずには、軍需産業の発展と経済全般の活性化を考えることができなかったからである。

金正日総書記はすでに1992年に優秀な科学者、技術者で「蓮河機械」開発チームを編成し、彼らが今後開発するＣＮＣ機械に「蓮河機械」というマークをつけるようにした。そして、食糧不足で困難をなめている人民、操業を中止した工場を考えて涙をのみながら貴重な資金をＣＮＣ機械の製作に振り向けた。

すべてが不足し、あまりにも困難な状況下で、決してたやすく勇断を下せるものではなかった。

あれほど困難な時期にＣＮＣ化を、禍を福に変える基本的方途として提起したのを見ても、金正日総書記の偉人としての風格をよく知ることができる。

総書記の決心と判断は正確だったし、ついに朝鮮で初のＣＮＣ機械が誕生した。総書記が「蓮河機械」開発チームが製作した

ＣＮＣ機械を初めて見たのは1995年4月の末だった。総書記は現地に出向き、「蓮河機械」の開発者たちが設計、製作したＣＮＣワイヤ放電加工機（4軸）を眺めて大変喜んだ。このＣＮＣ設備は朝鮮の全般的産業分野に先端突破の火を点じる一点の火種であった。

「蓮河機械」の開発者たちが異口同音に言っているように、初のＣＮＣ設備は金正日総書記の労苦と献身の結晶体であった。総書記が自ら着想し具体的な実現方途を示しただけでなく、必要な条件をすべて解決し導いてくれたからである。そのときから10年余り過ぎた今日、朝鮮のＣＮＣ産業は強固な土台を踏まえ、新世紀の産業革命を先導している。

金正日総書記は生涯の最期の瞬間まで全国のＣＮＣ化のために不眠不休の労苦をつくし、「蓮河機械」をモデルにして新世紀の産業革命ののろしを燃え上がらせた。

2010年12月にＣＮＣ機械工場の母体である熙川（ヒチョン）蓮河機械総合工場を現地指導しながら明るく笑った総書記の姿は、世界に向かって勝利を宣言する姿であり、工場に立ち並ぶ7軸、8軸、9軸のＣＮＣ機械は見るからに壮観であった。

朝鮮で激しく巻き起こったＣＮＣ化の熱風は、金正日総書記が示した国防工業を優先的に発展させ、同時に軽工業と農業を発展させるという経済建設路線の正当性を示威するものである。

朝鮮の強力な国防工業を裏打ちするのがＣＮＣ機械である。高度の技術を要する人工衛星の製作および打ち上げ、核実験、中距離および短距離ミサイル、ウラニウム濃縮設備、各種の先端軍事

技術機材はＣＮＣ機械を抜きにしては考えられない。

現在、朝鮮はＣＮＣ技術分野において世界的覇権を握っていると言える。ＣＮＣは金正日総書記の強力な政治手段であったし、ＣＮＣによって総書記の独特な政治魅力がさらに浮き彫りになった。世界のどの国の歴史にもＣＮＣを理解し、それを政治と結びつけた政治家はいなかった。

今日、朝鮮でのＣＮＣ化は軍需産業の範囲を脱して経済全般に及んでいる。

朝鮮で最先端科学技術分野を開拓する事業で達成された成果はこれだけではない。朝鮮の科学者、技術者は最近にも高度の先端技術を要する核融合技術の開発と第2回地下核実験に成功し、人工衛星「光明星（クァンミョンソン）2号」を成功裏に打ち上げ、血液型転換技術と一代雑種稲の育種などの最先端生物工学技術を開発した。

明白なのは、朝鮮が早い期間内に強盛国家を建設するというのは、科学技術で覇権を握るということである。

朝鮮の一心団結プラス最先端科学技術、まさにこれが朝鮮が建設しようとする強盛国家の実体である。

5　明日のために生きる人たち

ある社会を理解するには何と言ってもその社会に生きる人たちを知らねばならない。人間を知らず風物でも知ろうとするなら、家でフォトグラフや雑誌、テレビを見るのがましであろう。

朝鮮が強盛国家というとき、それは政治的に最も強固で安定し

ており、物質的・文化的財貨が人々の要求を充足させるほど豊かで、軍事力が強いということだけでは何か足りないものを感じる。もっと大事なのは、やはり人間、すなわち強盛国家に合った新しい人間の話があって然るべきだと思う。それでこそ社会をなしている人間と、社会的財貨と社会的関係についてすべて説明されたと言うことができる。

当該社会の人間がどんな人間であるかを知るには、彼らの人生観と価値観、道徳的品性と慣習などを知る必要があり、それを知るためにはまず彼らの日常的な言動をよく把握しなければならない。

朝鮮は「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」という集団主義の原則を基本的価値観としている社会である。朝鮮では万事が集団的に行われ、集団が優位を占めている。何事かが起こったとき、西側の人たちはまずお金と財産を先に考えるが、朝鮮人民は集団の利益と協力を先に考える。それほど朝鮮では、各人の思考と行動があくまで集団のためのものとなっている。

もともと団結と協力は人間の生存方式である。人間が自然の横暴な挑戦と包囲の中から逃れることができたのは、主に団結と協力を生存方式としたことにある。

朝鮮民族には古くから「十匙一飯」という生活倫理が伝統的に伝えられている。すなわち10人が1さじずつ寄せ合えば一杯のご飯になるという意味である。そのためか、朝鮮人民は他の民族よりも集団主義に容易に慣れ、それは一つの生活方式として定着している。

しかし、朝鮮人民が集団主義を自己の人生観、価値観にしているのは、ただ伝統的な生活倫理に習慣づけられているからではない。いかに高尚な生活倫理であっても、人々がそれを意識的に守らなければ、それは一種の規範にすぎない。

朝鮮人民が集団主義を生活方式としているのは、ほかならぬ金正日総書記の仁徳政治と関連している。

中国に「橘化為枳」（ミカンがカラタチに変わった）という言葉がある。この言葉は次のような故事に由来しているという。遠い昔、中国の淮水の南側は斉、北側は楚であった。あるとき、斉の大夫が楚を訪れると、楚王は酒宴を張って大夫をもてなした。何杯か酒を酌み交わし宴もたけなわのころ、官吏が就縛された人を連れてきて「斉の国の人で盗人です」と告げた。楚王がさりげなく聞いた。

「斉の人はもともと盗みをよく働くのだろうか」

それに対し大夫は「聞くところによれば、ミカンは江南の産地ではミカンになり、江北に移すとカラタチになると言われるが、葉は同じようでも味は全然違います。風土が異なるからです。今人々が斉にいるときには盗みというものを知らなかったのに、楚に来ると盗人になるのはどういう訳でしょう」と言うと楚王は何も言えなかったという。

「民衆は善政のもとでは善人になり、悪政のもとでは悪人になる」という教訓的な話である。

それで古くから、最上の政治は法や罰によって民衆を統治するのでなく、徳と礼をもって行うものだと言った。徳と礼の根本は

人間を愛することである。人民が歴史の主人として登場した現代社会に至っても、人々は卓越した指導者によって施される善政を期待している。

金正日総書記の仁徳政治は、朝鮮の平凡な人たちをみな善人に、愛と信頼の体現者に育てる仁徳の懐であり、全社会をむつまじく団結した一つの大家庭にしてくれる揺籃であった。

信頼と愛によって新しい社会を建設しようというのが金正日総書記の政治哲学であった。信頼と愛にもとづく団結と協力は、人間がこの地に出現したその日から誰もが望んだことであるが、それを解決した国も政治家もまだ現れていない。

長い歳月、人類があれほど渇望した真の愛と信頼は、朝鮮において金正日総書記の仁徳政治によって現実となった。朝鮮では金正日総書記を父と呼び、朝鮮労働党を「母なる党」と呼んでいる。人民に対する愛と信頼を政治の根本とし、天稟とした金正日総書記を領袖として仰いだ朝鮮で、領袖と人民間の関係は上下の関係ではなく、両親と子との関係と同じであった。

昨年まで朝鮮には誰もがよく口にする言葉があった。それは「金正日同志に喜んでもらえることをした」とか、「今後必ず金正日同志に喜んでもらえることをする」という言葉である。

金正日総書記に喜んでもらえる人生を送るというのは、彼らの生きがいであり名誉であり、幸せであった。彼らは仕事の成果によって、社会と人民に対する善行によって、金正日総書記に喜びを与えればそれでよいのであり、いかなる名誉も「花束」も望まなかった。こうした朝鮮人民の精神世界を西側の人たち

は理解しがたいであろう。しかし、花のあるところに種子があり、川のあるところに源があるように、朝鮮人民の人生観が金正日総書記の変わることない愛と信頼、仁徳政治に根差していたことは間違いない。

集団主義的価値観が支配する朝鮮では、すべての人が互いに愛し助け合い、温かい人情味をもってむつまじく暮らしている。

「美女同士は決して親しまない」という言葉があるが、これは個人主義にもとづく道徳倫理の一断面を示している。これを社会心理学では「平等反発現象」といっている。同じように美女であることで二人の女性は「平等」であり、平等になれば互いに嫉妬して反発するということである。実力や権力が同じような人同士は仲が悪く、業績が同じような人同士は互いに称賛せず、上部からの信任が同じような人同士は間隙が生じ、実力が同じような学生同士は親しまないというのも一種の平等反発現象と解釈される。これは程度の差こそあれ、個人主義にもとづく社会の人間関係でよく見られる人間の心理現象である。

反面、「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」という集団主義が生活に具現されている朝鮮では、同志的団結と協力が社会関係の基本をなしており、人々は他人のために自分をささげようと努める道徳的姿を示している。たとえば、学童たちが「5点最優等」学級になるため互いに教え助け合うかと思うと、生産競争で先んじた労働者が立ち遅れた労働者を助けるため時間と労力を惜しみなくささげる。技術者は自分の研究成果をちゅうちょすることなく公開し、集団的な協力によって新しい技術を

開発していく。

朝鮮では子のない年寄りを引き取って実の親のように孝養を尽くす若い夫婦がいるかと思えば、親のない子どもを引き取って実子のように育てる家庭もあり、軍事訓練中不慮の事故で不具となった「栄誉軍人」に嫁ぐ娘もいる。青年たちは祖国防衛をまたとない神聖な公民の義務と見なして軍隊に入隊し、都市で育った青年たちは炭鉱と農村へ志願して進出している。彼らはみな金や名誉のためにそういう立派な行動をするのではない。どの国であれ青年は社会の重鎮をなし、社会の進歩と民族の前途が青年世代の役割にかかっているということを考えるとき、朝鮮の未来は楽観的だ。朝鮮の青少年のあいだには麻薬使用者もおらず、マフィアや強盗もおらず、自殺者もいない。彼らは自分の仕事に誇りと満足を感じ、挫折感や敗北感を知らず、将来に対する不安感をもたず未来社会の担い手に育っている。

青年だけではない。朝鮮ではすべての人が未来に対する自信と楽観を抱き希望にあふれて生活している。

普通先を見通す眼識をもって社会を考察する知性人は、1国、1民族の展望について言うときドイツ語の『Sein』と『Sollen』という単語を先にあげる。この単語が現在と未来を意味する言葉であるということは一般の常識であるが、よりによってなぜその言葉を英語か他の言葉でないドイツ語で表現するのかというのにはそれなりの理由がある。それは第2次大戦後、敗戦の廃墟の中で困難をなめていたドイツが不幸な「今日」を踏みしめて立ち上がり、富強な「明日」を建設した「ライン川の奇跡」が連想さ

れるからである。
　そういう奇跡を生んだドイツ人たちが今日は、朝鮮の現実を見て「未来に生きる人たち」と言っているのである。
　人間はきょうを生き明日に向かう。ここできょうを中心に、過ぎ去ったきのうと来たる明日にどう向き合うかということは誰にとっても重要な問題となる。きょうはきのうの連続であり、その累積の結果であると同時に明日の出発点であり、その転換の契機である。
　「今日のための今日を生きるのでなく、明日のための今日を生きよう！」これは金正日総書記の人生観であると同時に全朝鮮人民の人生観となっていた。
　自分の力を信じる人たち、きょうよりもすばらしい明日が必ず来るという希望を抱いて生きる人たち、自分たちよりも次世代の幸福を願う人たちであってこそ、明日のためのきょうを生きることができるのである。
　未来を愛せよ、次世代のために、これはつとに抗日革命戦争当時から朝鮮の革命家たちが信念としてきた闘争スローガンであり、精神的原動力であった。このような信念をもっていたがゆえに、彼らはあれほどひどい苦難と試練、死を前にしても動揺したり尻込みしたりせず、それに立ち向かうことができたのであり、祖国を解放し廃墟の上に今日の社会主義朝鮮を打ち立てることができたのである。
　抗日革命先達たちのその尊い魂は、金正日総書記によって朝鮮人民の心に一つの精神的遺産として継承され、今日、強盛国家

の建設で遺憾なく発揮されている。

集団主義的価値観を生の尺度とし、高尚な人間的香気で社会を美しくしていく朝鮮人民、よりよい明日のためにきょうをささげていく朝鮮人民より屈強で立派な民族はない。

あとがき

ほぼ100年にわたる現代朝鮮の歴史は人類に一つの大きな真理を示している。それは1国、1民族の歴史と運命の開拓において指導者がいかに重要な役割を果たすかということである。指導者が偉大であるとき、小さい国も強国になり、民族も繁栄するというのが、まさに現代朝鮮の歴史が世界史に残した一つの真理である。

金日成主席と金正日総書記は朝鮮民族の運命を救い輝かした民族の救世主であり、5000年の民族史がなしえなかった巨大な業績を当世に成し遂げた世紀の偉人である。

10年余り前、平壌を訪れた米国のある人士はこう言った。

「奇跡だ。毎日毎時あれほど厳しい挑戦を受けているこの小さい共産主義国家が地球上に今なお健在しているということ自体が奇跡だと思う。さらに驚くべきことは、この国の金正日総書記が依然として共産主義思想を堅持しているが、誰もこれに対して疑問を抱いていないことである。人々は食糧難に見舞われているが依然として職場に出ており、歌をうたい踊りをおどっており、長い時間会議を開いて政治を論じている。そしてスポーツ競技もしばしば行っている。

そのときわたしは、わたしの案内人と、対面する人たちにこういう質問をした。

『北朝鮮は経済も悪循環しており、天災も続いており、世界の多くの人たちは共産主義を固執するあなたたちを快く思っていない。それでもずっと生きていけると思うのか』

すると彼らは異口同音にこう答えた。

『世界がひっくり返ってもわれわれは十分生きていける。なぜなら自分の領土があり、自分の人民がおり、自分の制度があり、自分の領袖さえいれば十分生きていくことができるからだ。われわれは以前もこのように苦しい生活をした。1950年の戦争の際、米国と15の国がわれわれを植民地奴隷にしようとしたときも、われわれは自分の肉親をすべて失いながらも最後まで戦った。

戦後、われわれは非常に苦しい暮らしをしたが、奮然と立ち上がって社会主義を建設した。今は東欧の社会主義諸国がみな崩壊した。それで恐らくあなたがた米国は意気揚々としているのだろう。あなたがたがわれわれもそのように崩壊することを望んでいるということを、われわれは知らないわけではない。

けれども絶対にあなたがたの望みどおりにはならないだろう。共産主義者であるわれわれがあなたがたに投降すれば、あなたがたはわれわれを許すだろうか。また、米国が共産主義の側に寝返ることができるとわれわれが思うとでもいうのか。…自由のためにたたかって飢え死にするとしても、われわれは自分の領袖のいる祖国の地に埋もれるであろう。

これがわれわれの信条である。しかし、われわれもいつかは必ず立ち上がるとわれわれは信じている。なぜなら、われわれには偉大な領袖がおり、偉大な党があり、偉大な人民がいるか

らである』

素朴な最下層の人であるほど堂々とこのように答えるのである。わたしはこれが、今日北朝鮮がなした精神的総括であり、彼らの精神的深さだと思う。また、まさにこれが、今なおこの国が持ちこたえている最も重要な精神的柱だと思う」

当時、彼は朝鮮に対して比較的客観的で詳細な評価を下した。しかし、彼がもし10余年を経た今日の朝鮮の現実を目撃したならばこう言ったであろう。

朝鮮は永遠に崩壊しない強盛国家だと。

この図書を結びながら、百聞は一見に如かずということわざを借りて、みなさんにこう勧めたい。

朝鮮を知ろうとするなら、朝鮮が生んだ不世出の偉人について知ろうとするなら、朝鮮へ来てみなさい。